

博 多 82

博多遺跡群第115次調査の報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書第708集

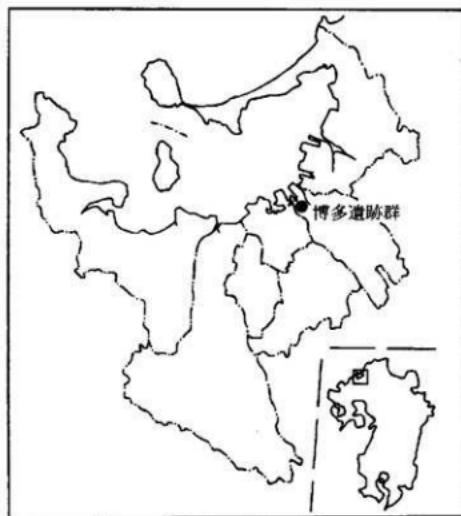
2 0 0 2

福岡市教育委員会

H A K A T A

博 多 82

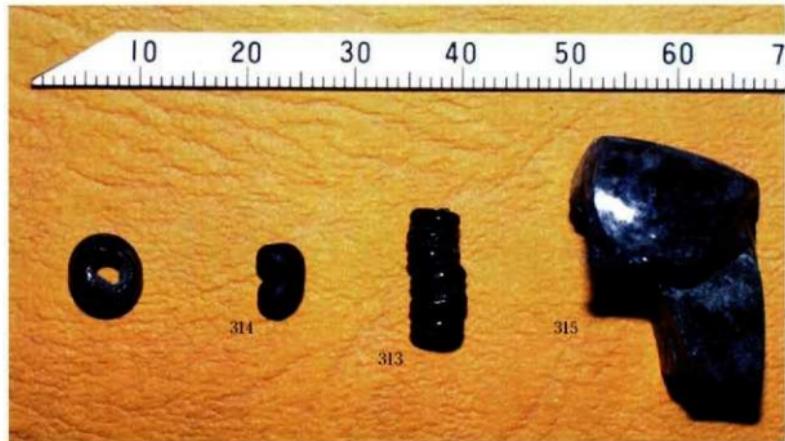
博多遺跡群第115次調査の報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書第708集



調査番号 9913
遺跡略号 HKT-115

2002

福岡市教育委員会



序

玄界灘に面した福岡市には古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されており、それらを保護し子孫に伝えていくことは私たちの義務であります。しかし近年の著しい都市開発によってそれらの多くが失われつつあります。福岡市教育委員会にはこのような開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財に関しては事前の発掘調査を行い記録の保全に努めています。

本書は博多遺跡群の発掘調査について報告するものです。博多遺跡群は弥生時代以降集落として発達し、その後11世紀代には中国貿易の中心地となり、その後長い間大陸との交易の拠点として栄えたため、多くの遺構と遺物が出土しており、全国的に注目を集めている遺跡のひとつであります。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで河本建設株式会社をはじめとする多くの方々の御理解と御協力を賜りましたことに関しまして心から謝意を表する次第でございます。

2002年3月29日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

例　　言

1. 本書は1999年5月6日から10月26日まで発掘調査を行った博多遺跡群第115次調査の記録である。
2. 本書で使用した遺構の実測図の作成と写真撮影は屋山洋が行った。
3. 本書で使用した遺物の実測図作成は名取さつきと屋山が遺構と遺物の製図は井上加代子と藏富士寛、屋山が行った。
4. 本書で使用した方位は磁北である。
5. 掘出中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。
6. 本書に関する図面、写真、遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管される。

調査番号	9913	遺跡略号	HKT115
調査地地番	博多区店屋町33・34・77	分布地図番号	No.49 天神
開発面積	703.4 m ²	調査実施面積	601 m ²
調査期間	1999.5.6~1999.10.26	事前審査番号	10-2-377

目 次

Iはじめ	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 調査地点の立地と環境	1
II調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 第1面の調査	5
3. 第2面の調査	9
4. 第3面の調査	25
5. 中世以前の出土遺物	34
6. 鋳造関連遺物	37
7. その他の出土遺物	37
8. 小結	39
9. 墨書き器	40
10. 骨角器	40
11. 動物遺存体	49

挿図目次

第1図周辺遺跡分布図	2
第2図博多遺跡群内調査区位置図	3
第3図調査区周辺図	4
第4図第1面全体図	折り込み1
第5図第2面全体図	折り込み2
第6図第3面全体図	折り込み3
第7図第1面上坑実測図I	7
第8図第1面上坑実測図II	8
第9図第1面上坑出土遺物実測図I	10
第10図第1面上坑出土遺物実測図II	11
第11図第1面溝および出土道実測図	12
第12図第2面上坑実測図I	14
第13図第2面上坑実測図II	15
第14図第2面上坑実測図III	16
第15図第2面上坑出土遺物実測図I	17
第16図第2面上坑出土遺物実測図II	18
第17図第2面上坑出土遺物実測図III	19
第18図第2面上坑出土遺物実測図IV	20
第19図第2面上坑土槽遺物実測図V	21
第20図第2面上坑出土遺物実測図VI	22
第21図第2面上坑実測図IV	23
第22図上坑出土遺物図V	24
第23図第2面上井戸実測図I	25
第24図第2面上井戸出土遺物実測図I	26
第25図第2面上井戸出土遺物実測図II	27
第26図第3面上坑実測図	28
第27図第3面上坑出土遺物実測図I	29
第28図第3面上坑出土遺物実測図II	30
第29図第3面上坑出土遺物実測図III	32
第30図第3面上井戸実測図I	32
第31図第3面上井戸実測図II	33
第32図第3面上井戸実測図III	34
第33図第3面上井戸出土遺物実測図I	35
第34図古代以前の遺物	38
第35図製造関連遺物実測図	38
第36図その他の出土遺物	39
第37図墨書き器I	42
第38図墨書き器II	43
第39図墨書き器III	44
第40図墨書き器IV	45
第41図墨書き器V	46
第42図骨角製品	47
第43図御供所地区出土土器実測図	48
第44図出土動物遺体I	55
第45図出土動物遺体II	56

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成10年10月29日、河本有満氏より福岡市教育委員会に対し博多区店屋町33・34・77に関する埋蔵文化財の事前審査申請書が提出された。申請地が埋蔵文化財包蔵地区である博多遺跡群内に位置することから、福岡市教育委員会では埋蔵文化財の有無の確認をするための試掘調査を11月9日に行った。申請地中央の事務所ビルが解体前だったので駐車場部分にトレーナーを設定し掘り下げたところ、GL下約300cmのところで黄褐色砂に達し、掘下げ中に遺構と遺物を確認した。教育委員会では、建設工事時より遺構が壊されることになるため、事前の発掘調査が必要であると判断し、申請者と協議を行った。その結果平成11年4月6日に調査の契約書を締結し、平成11年5月6日から調査を開始し、10月25日に発掘調査終了、26日に調査器具と遺物の搬出を行った。

2. 調査の組織

調査委託：河本有満

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査統括： 埋蔵文化財課 課長 山崎純男
調査第1係長 山口譲治

調査庶務： 文化財整備課 宮川英彦

調査担当： 埋蔵文化財課 事前審査 田中壽夫 加藤隆也
調査第1係 屋山洋

調査作業員： 潤戸啓治 小路丸嘉人 三浦力 村本義夫 石川さやか 池聖子 大音輝子
小池温子 小路丸良江 小松富美 指原始子 田端名穂子 水田優子 中村幸子
花田則子 増田ゆかり 吉川暢子 川崎朋子 人和武史 梅田隆憲 岡田朋子
岡あゆみ 中村文美 田中翠 徳永洋二郎 中山竹男 平山栄一郎 臨田栄
尊田紹代 柴田常人 高木美千代 田中和古 松岡芳枝 一ノ瀬フミヨ

資料整理： 名取さつき 大石加代子 渡野年代 藤野洋子 山口初子

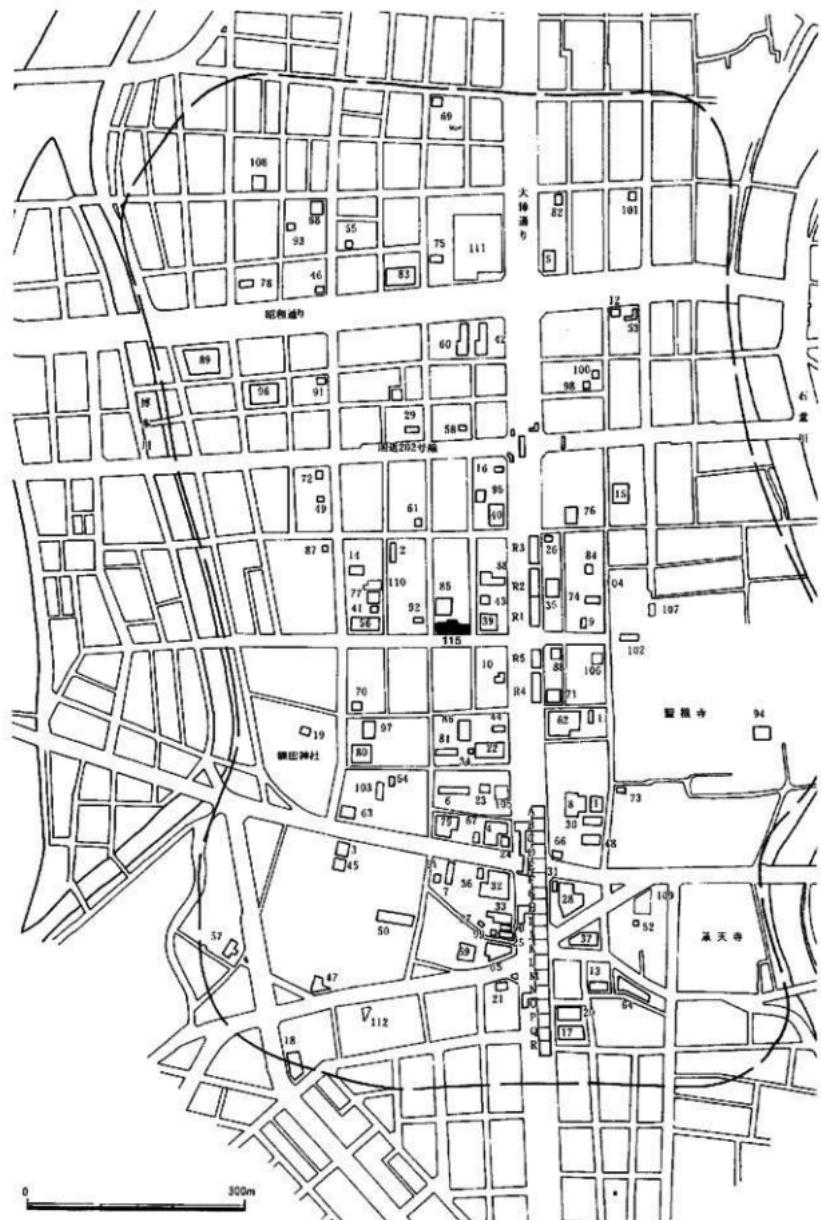
3. 調査地点の立地と環境

調査地点は博多遺跡群の2つの砂丘のうち、南側の博多浜場に位置する。博多浜は東の吉塚・堅粕から延びる一連の砂丘で、現状では博多遺跡群の東端で石堂川によって切られている。今回の115次調査地点はこの博多浜の北部端に位置し、北端の微高地から南側に緩やかに傾斜する斜面上に位置する。博多遺跡群で古い遺構は博多浜の南側で弥生時代中期の甕棺墓が出土している。古墳時代になると初頭の土師器壺が多く見られる他、地下鉄祇園駅周辺では前方後円墳の博多1号墳が築かれその周辺には方形壙滑墓群が広がっていた。古代になると博多浜の南端に官衙的施設がみられ、かたいなど役人がいたことを示す遺物も多く出土している。11世紀になると湯廬館に代わって対外交流の拠点となり遺構の数は爆発的に増加する。初期貿易当時である窯系の青磁碗は粗製品ではあるがよく出土しており、その後の類型白磁の時期になると多量の貿易陶磁が出土するようになる。その後在日貿易商人の勢力を基に発展を続け鎌倉時代末期には鎮西探題が置かれ九州の政治的中心を兼ね備えるが世紀に博多を介さない京阪地域での貿易取引が行われるようになると博多の優位性は失われ、衰退して

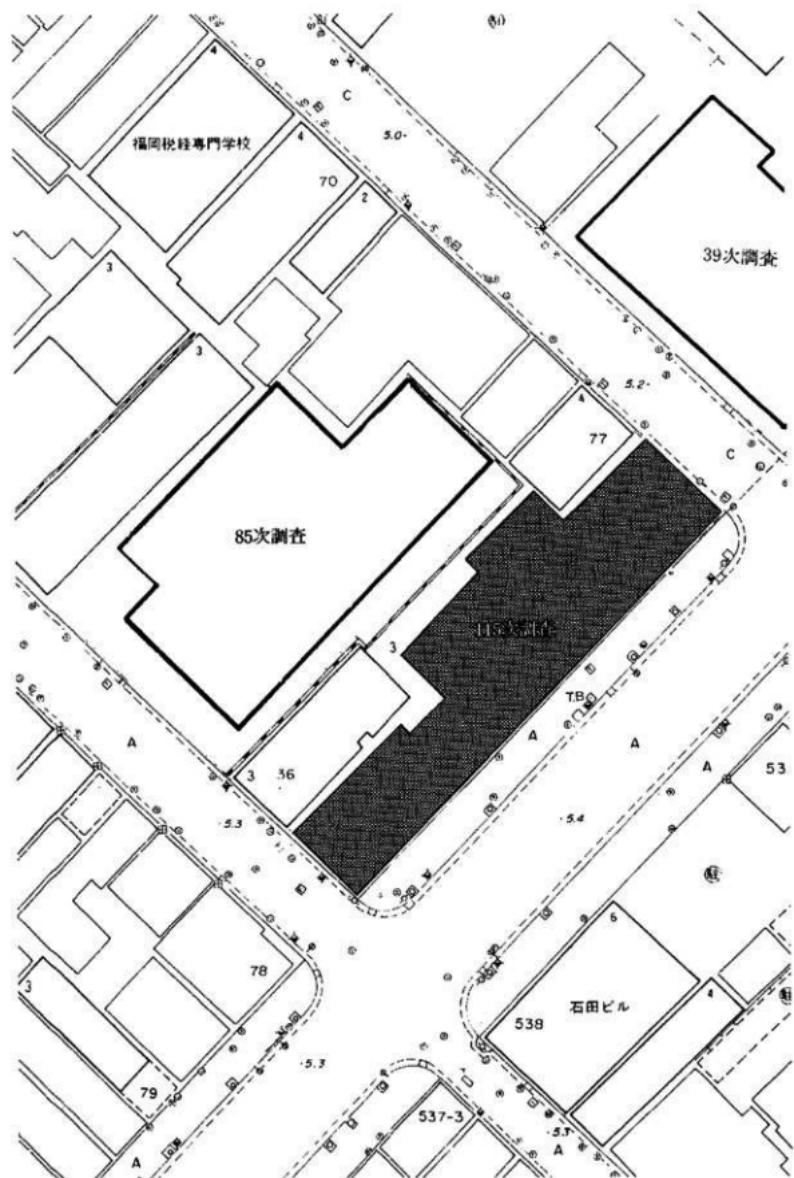
いった。その後江戸時代に鎮国が行われ海外との交流が不可能になると博多は一地方都市と化してしまった。



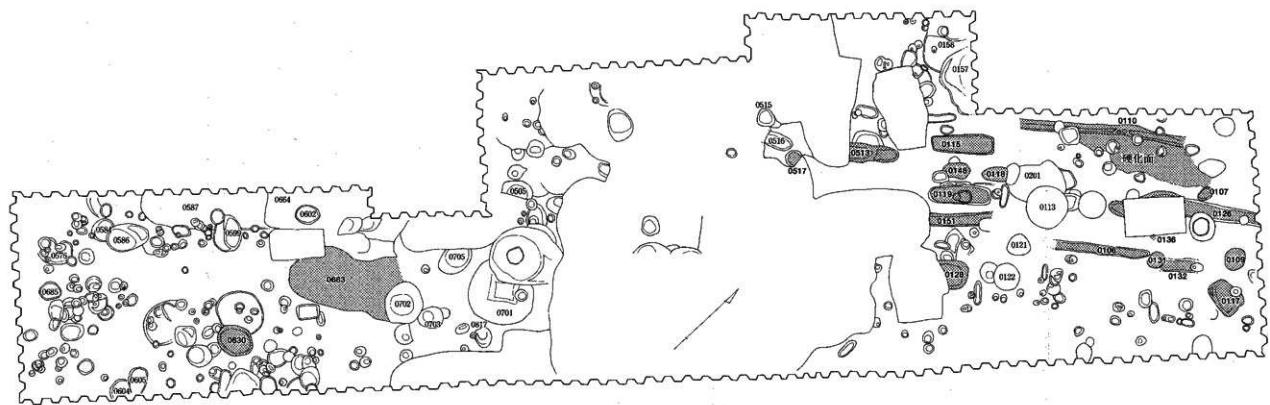
第1図 博多遺跡群位置図 (1/25,000)



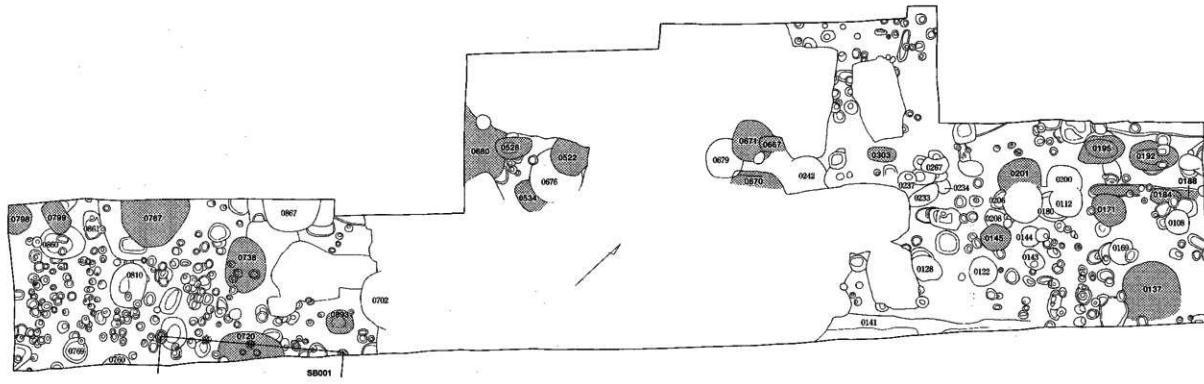
第2図 博多遺跡群内調査区位置図



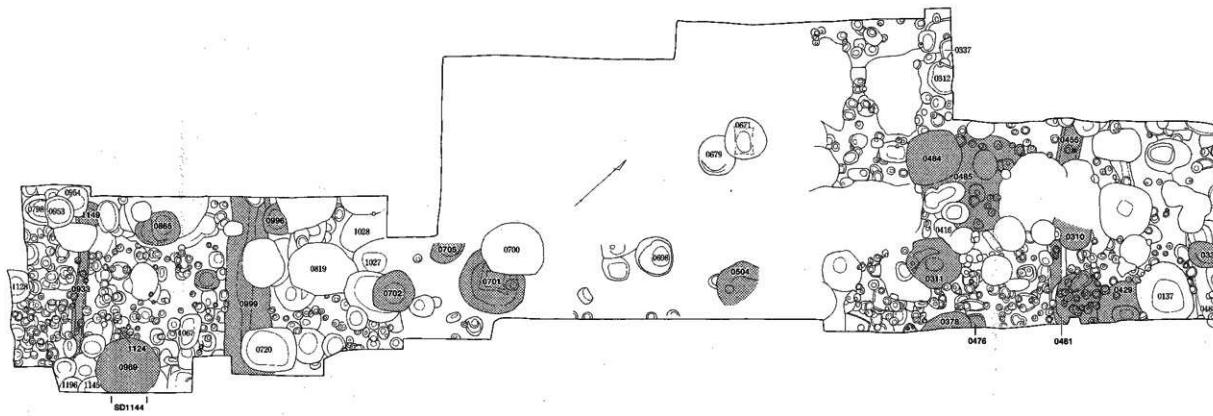
第3図 調査区周辺図



第4図 第1面全体図



第5図 第2面全体図



第6図 第3面全体図

II 調査の記録

1. 調査の概要

申請者から重機の提供を受け、5月6日からI区の表土剥ぎを行った。事前の試掘調査で遺構が確認された地表下180cmまでは機械で掘削した。この段階で地山である黄褐色砂層まで約60~80cmの深さだったので、機械掘削面を第1面とし、第1面から30cm下を第2面、60cm下を第3面とした。南側は第3面でも黄褐色砂層に達しなかったため更に掘り下げたがそこで検出した遺構は第3面日の岡面に付け加えた。調査は当初東西の2区に分けて行う予定であったが、調査地中央部が解体した建物の基礎によって深く攪乱されており、その土を除去したところ廃土が予定より多く出て表土剥ぎのスペースがなくなった。そのため1回の調査面積を狭めて3分割に変更して調査を行った。その間、調査事務所、重機、水中ポンプや照明用ライトなどの提供で河本建設から多大な協力を得た。

2. 第1面の調査

1) 第1面検出遺構と出土遺物

道路状遺構（第4図）I区北端部付近で検出した硬化面である。焼上や白色砂等を含み周囲の堆積と比較するとかなり固く締まっていた。硬化面は東側の第39次調査で確認された東西方向の道路に該当すると思われる。硬化面の南端に溝状遺構が数条あり、側溝の可能性が考えられる。

土坑

S K 0 1 0 7（第7図）I区東側で検出した。平面は卵形を呈し長径70cm、深さ26cm。底面から14cm上でイノシシの肩甲骨が水平な状態で出土した。出土遺物（第9図001~005）。001・002は白磁碗、003は白磁平底皿。004はガラスが付着した坩堝。005は須恵質の磚で、表面にひび割れや植物質の圧痕がみられ粗製である。一面がわずかに崩耗している。

S K 0 1 0 9（第7図）I区東端に位置する。平面は円形で径95cm、深さ47cmを測る。北側に段をもつ。覆土掘り下げ中に銅鏡やシカの骨が出土した。出土遺物（第9図006~014）。006~007は黄褐釉盤。008~013は土師器の壺・皿で糸切り。014は土玉、径2.9cmを測る。

S K 0 1 1 5（第7図）I区北西側に位置する長方形の土坑である。南側のS K 0 1 1 9と対になり、道路側溝と主軸が同じ事から道路に作る施設ではないだろうか。遺構は長さ261cm、幅86cm、深さ20cmを測る。陶磁器は少なく小さな染付けの破片と茶褐色擂鉢のみである。上師皿（糸切り）の小破片が10枚分以上出土している。土玉が2点出土しており径は約2.5cmを測る。

S K 0 1 1 7（第7図）I区東南隅に位置する。平面は指円形で長径161cm、短径94cm、深さ78cmを測る。遺物は白磁碗V-4類、IV-1類で外底部に墨書きがみられる。

S K 0 1 1 8（第7図）I区中央に位置する。東西に長い楕円形を呈し、長径111cm、短径61cm、深さ167cmを測る。覆土は上半が炭化物を多量に含む灰褐色砂質土がレンズ状に堆積しているのに対し、下半は白色砂を含む灰色粘質土の堆積で締まりが非常に弱い。壁に流水痕跡と思われる縱方向の溝がみられる。覆土中からイルカ類の椎骨が出土した。また上半の炭化物層は焼けた骨小片を含む。遺物は白磁碗の小片と共に上師器壺（糸切り、板状压痕）、瓦質の擂鉢が出土している。

S K 0 1 1 9（第7図）I区西側に位置する土坑でS K 0 1 1 5の南側に並ぶ。長さ261cm、幅87cm、深さ21cmを測る。出土遺物。外面に菱形格子文を施した青白磁碗、白磁碗V-2類、白磁平底皿3類、

龍泉窯系青磁碗 I - 2 類や横褐釉盤の他に土師器坏と皿は糸切りで板状圧痕がみられる。越州窯青磁碗片や土玉（径2.7cm）、縄目叩きと布目の压痕を持つ須恵質の瓦片が出土。

S K 0 1 2 0 (第8図) I区で検出した。平面楕円形を呈し、長径118cm、短径78cm、深さ56cmを測る。出土遺物（第9図15~025）。015~020は白磁碗である。018は口ハゲの口縁。021は白磁水柱の注口、023~024は土師器坏。023は内面口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用している。025は土鍤。その他8世紀後半の須恵器高台付き坏が出土している。

S K 0 1 2 8 (第7図) I区西側に位置する。東西に長い楕円形を呈す。北西側のふくらみは別の遺構か。長径136cm、短径111cm、深さ66cmを測る。出土遺物（第10図020~033）。032は脚跡の一部と思われる。黒色。033は須恵質の縁である。

S K 0 1 3 1 (第7図) I区東側に位置する埋臺である。上半部は削平されており、下半のみ遺存している。道路側溝のSD0132を切る。甕は国産陶器の大甕で外面が茶褐釉、内面が黄緑色を呈す。外面に5×5cmの方形に細かな格子を刻んだタキが胴部を水平方向に廻り、無文部分とタキが層状にコントラストをなす。底部に大きな歪みがみられる。最大胴径は70cm前後を測り、全体に砲弾型を呈している。甕内部からは何も出土しなかった。

S K 0 1 4 8 (第8図) I区北西側に位置する。長径58cm、短径33cm、深さ48cmを測る。底面から12cm浮いたところで鉄製の鎌が壁に沿って出土した。出土遺物（第10図034~037）。034~036は土師器坏、037は土鍤皿。いずれも糸切りである。

S K 0 5 1 7 (第8図) II区東側に位置する。平面円形で径73cm、深さ23cmを測る。床面から白磁碗IV類と共にイノシシ左頭蓋骨が出土している。歯の咬耗から若い個体である。頭蓋骨断面の状態が悪かったので人為的に割ったのかは不明であるが現状で解体痕はみられない。

S K 0 6 3 0 (第8図) III区中央南寄りに位置する。平面は東西に長い上坑で長径157cm、短径128cm、深さ47cmを測る。断面は浅皿状で握り拳大の礫を多く含む。出土遺物（第10図038~041）。038~039は白磁碗。038は外面に片彫りで蓮弁模様を施す。鎌なし。039は輪花で内面を縦線で6つに区切る。040は糸切りの土師皿、041は片口鉢である。

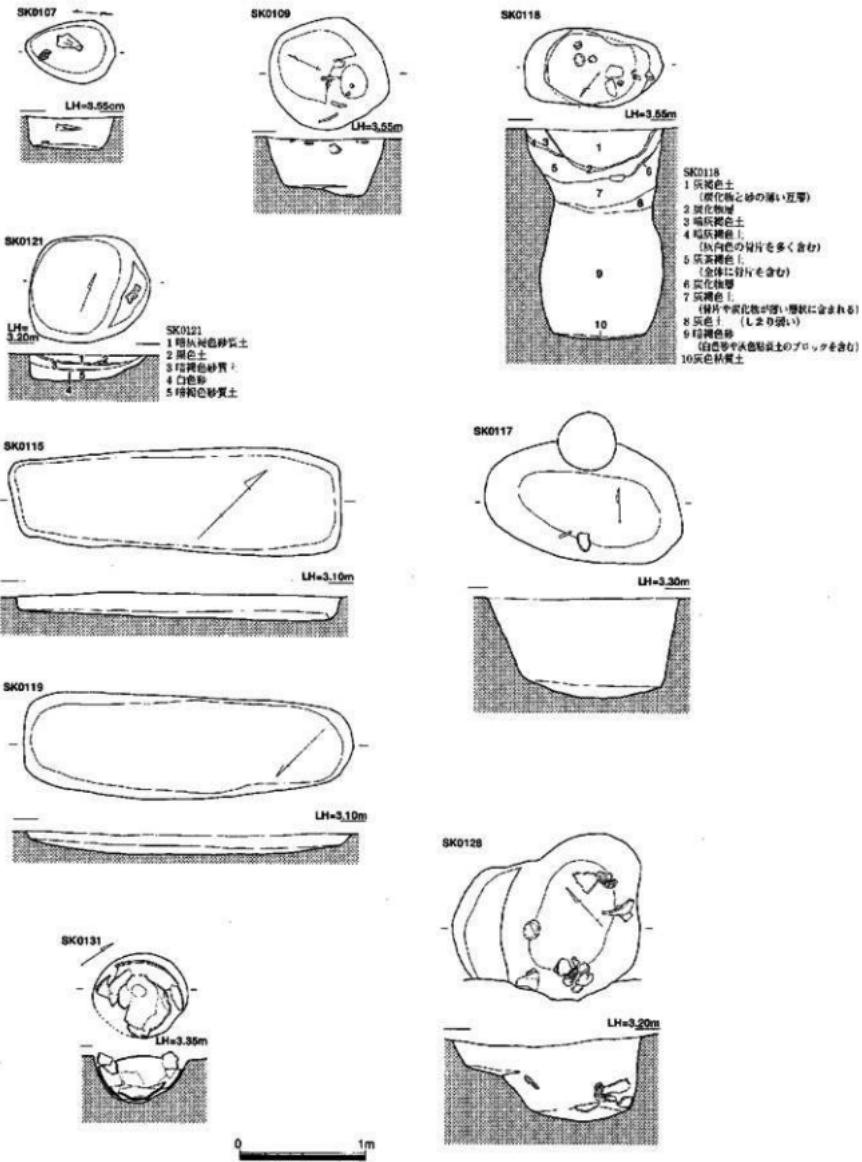
S K 0 6 6 3 (全体図) III区北東側で検出した。上層の近世層からの掘り込みで東側へ溝状に延びる。覆土は鉄造鉄滓を多量に含んでおり、その隙間に土や炭化物が入っている状態である。土器などの遺物はほとんど出土していないが、土師皿が数点出土した。

S K 0 7 3 5 (第8図) III区北東側に位置する。遺構としては確認できなかったが1面から2面への掘り下げ中に黄褐釉盤の破片と礫が集中して出土したので握り方が不明ながらも土坑が存在すると考えて遺物を取り上げた。黄褐釉盤の他に土師皿（糸切り）や青磁平底皿（I-2類）、土師坏（ヘラ切りで板状圧痕あり）が出土し、周間から魚骨がまとまって出土した。出土遺物（040・041）。

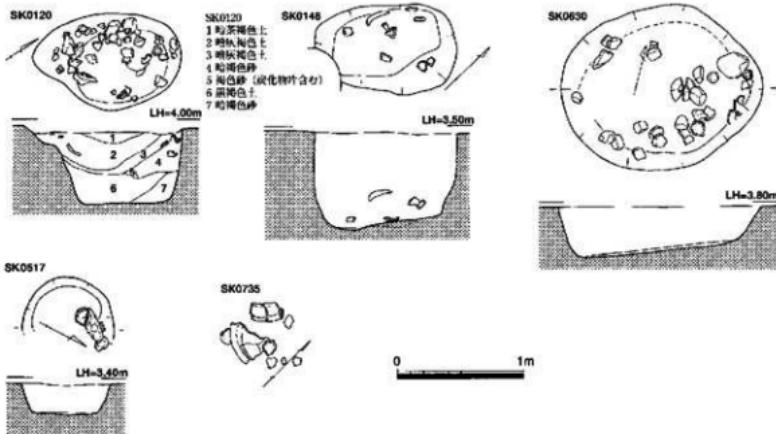
S X 0 1 3 6 (第4図) I区東側に位置する。遺構としては確認できなかったが1面の遺構検出中ガラス堆積の口縁から頭部が出土した。内面に白色のガラスが付着。胎土は須恵質で外面は黒色を呈す。破片が数点出土したため、土坑および柱穴状の遺構があると考え遺構番号をつけて取り上げた。遺物は小片になっており復元できなかった。

溝

S D 0 1 0 6 (第11図) I区中央で検出した東西方向の溝である。幅38cm、深さ6cmを測る。床面から3cmほど浮いて糸切りの上師坏が出土している。多少軸がずれているがSD0132やSD151とつながって1本の溝になる可能性もある。調査区の東側に隣接する39次調査で14世紀頃の東西方向



第7図 第1面土坑実測図 I (1/40)



第8図 第1面上坑実測図Ⅱ (1/40)

の道路が確認されており、それに続く道路側溝の可能性がある。軸がずれているのは道路が時期により南北に移動した結果であろう。出土遺物（第11図048～051）。048は茶褐色皿で胎土は赤褐色である。049は黄褐色盤。050～053は土師器壺、054は土師皿である。

S D 0 1 1 0 (第4図) I区北側で検出した東西方向の溝である。幅20cm、深さ32cmを測る。S D 0 1 0 6との間に一部であるが焼土、白色砂等を含む道路硬化面と思われる固く締まった面を確認した。出土遺物は白磁碗V類、白磁皿VI類、糸切りの土師皿等である。

S D 0 1 2 6 (第11図) I区東側中央で検出した東西方向の溝である。幅が0106や0110に比べ幅広で軸がずれているが、別時期の道路側溝と思われる。幅70cm前後、深さ約33cmを測る。覆土中から焼けた角礫、糸切りの土師皿、青磁碗片、シカの指骨が出土している。シカの指骨は基節骨、中節骨、末節骨が連絡しており、すぐ近くで解体が行われたことを示している。その他に炉壁、鋼滓、銅錫の鋳型小片が出土した。焼けた礫や炉壁は東側に集中する。隣接する第85次調査では15世紀代の726号遺構で鍋鋳型や中子、取り瓶、羽口がまとまって出土しており、ここで使用した道具を投棄したものと思われる。S D 0 1 2 6は推定道路の中央部付近に位置する。硬化面の焼上や炭化物が鉄生産時のものでそれを廃棄したものであれば道路北側の側溝である可能性が高いといえる。15世紀以降。

S D 0 1 3 2 (第4図) I区東側で検出した。S D 0 1 0 6と同一溝か。

S D 0 1 5 1 (第4図) I区西側に位置する東西方向の溝で幅28cm、深さ23cmを測る。道路側溝と思われ、東側でS D 0 1 0 6・S D 0 1 2 6のいずれかにつながるものと思われる。

S D 0 1 5 3 (第11図) I区西端で検出した東西方向の溝で、S D 0 5 1 6と繋がる可能性がある。断面半円状を呈し幅83cm、深さ30cmを測る。覆土は暗褐色土を主とし炭化物を多く含む。西側が一段深くなっている。焼けた礫が集中している。その中から陶磁器と共にイノシシの下顎骨や肋骨、イルカの椎骨が出土している。出土遺物（第11図042～047）。042・043は白磁碗。044は龍泉窯系青磁碗である。045・046は陶器の大瓶で045は暗オリーブ色の釉がかかる。胎土赤褐色で粗い。045は茶色もしくは暗オリーブ色の釉がかかる。胎土は粗く赤灰褐色を呈す。白色砂と黒い転々を含む。外側の剥落が激しい。047は土師器壺で糸切りである。

3. 第2面の調査

1) 第2面検出遺構と出土遺物

土坑

S K 0 1 3 7 (第12図) I 区の北東端に位置する。直径250cmの円形を呈し深さ170cmを測る。掘り方は逆台形を呈す。覆土は砂質土を主とするレンズ状の堆積である。遺物は多く土師器は復元できただけでも壊30枚以上、皿40枚以上を数え小破片を含めると更に多くなる。その他白磁碗IV・V類、白磁皿II-1・III類、褐釉の瓶片、黒釉の碗が破片で出土している。

S K 0 1 4 5 (第12図) I 区中央に位置する。径154cmの円形を呈し、深さ112cmを測る。底面は南側がわずかに低い。覆土は炭化物を多く含む粗砂が薄くレンズ状に堆積しており、底と西壁に暗褐色砂質土を貼り付けている。貯蔵用の豈穴として利用したのであろうか。中間層で土師皿(糸切り)、白磁碗IV・5-1類、白磁皿VI-1類が出上した。出土遺物(第15図055~066)。065は土師質の棒状土製品である。一边が2~2.5cmで長さは不明である。一面だけ強く被熱している。好みの構築材か。066は須恵質の平瓦で縁日のタタキと凹面は削りを施す。12世紀前半か。

S K 0 1 6 9 (第13図) I 区東寄りに位置する。平面円形を呈し直徑143cm、深さ132cmを測る。ほぼ円筒形で底面直上の壁がえぐれている。覆土はレンズ状堆積である。下半部から土師器壊(ほとんど糸切り)40枚以上、土師皿27枚以上(糸切り)須恵瓦片、白磁碗V・VII類がまとまって出土している。廃棄土坑である。

S K 0 1 8 4 (第13図) I 区北東隅に位置し、S D 0 1 8 8 を切る。平面長方形を呈し長径109cm、深さは検出面から74cmを測る。断面は逆台形を呈す。覆土は炭化物を多く含むレンズ状の堆積で、最下層は炭化物や骨片がそれぞれ薄くレンズ状をなす。土師器壊・皿の小片と黄褐色盤が出土している。11世紀後半以降。

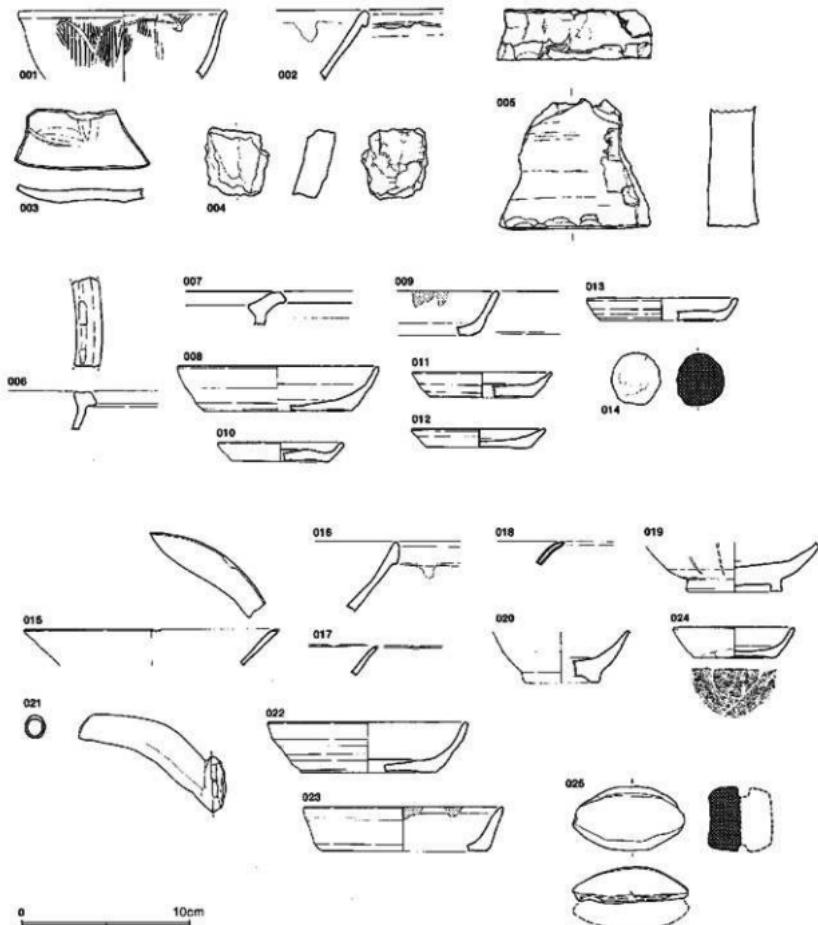
S K 0 1 9 2 (第13図) I 区北隅に位置する。径40cmの根石を埋めた柱穴に切られる。平面梢円形で長径210cm、短径128cm、深さ79cmを測る。断面は逆台形を呈す。覆土は炭化物や白色砂を含む暗褐色砂がレンズ状に堆積しており、粘土を含むのかカチカチに固まっている。一度埋まったのち掘り直しており、粗いレンズ状堆積をなす。白磁碗IV類が出土している。12世紀前半か。

S K 0 1 9 5 (第13図) S K 0 1 9 2 の西南側に並ぶ。平面はいびつな梢円形で長径176cm、短径118cm、深さ88cmを測る。断面は箱形を呈し覆土は炭化物と焼土粒子を含む砂質土の薄いレンズ状堆積である。白磁碗IV類が多くIII類も少量出土している。その他土師壊(ヘラ切り・糸切り)、土師皿(糸切り)、須恵器大甕、瓦器皿などが出上している。

S K 0 2 0 1 (第13図) S K 0 2 0 0 の西南に位置する。平面梢円形で長径184cm、深さ129cmを測る。断面は逆台形を呈す。他の井戸より浅く湧水点に達しないことや土層で井戸枠が確認できないことから土坑とした。覆土はレンズ状の堆積である。白磁碗V類、同安窯系青磁碗I類、土師器壊(糸切り・ヘラ切りの両方)須恵瓦片、碁石が出土した。

S K 0 2 0 8 (第13図) I 区中央に位置する。S K 0 1 4 5 に切られる。現状で深さ52cmを測る。東側に床面から13cmの高さに段を持つ。白磁碗V類、白磁平底皿、土師壊が出土した。

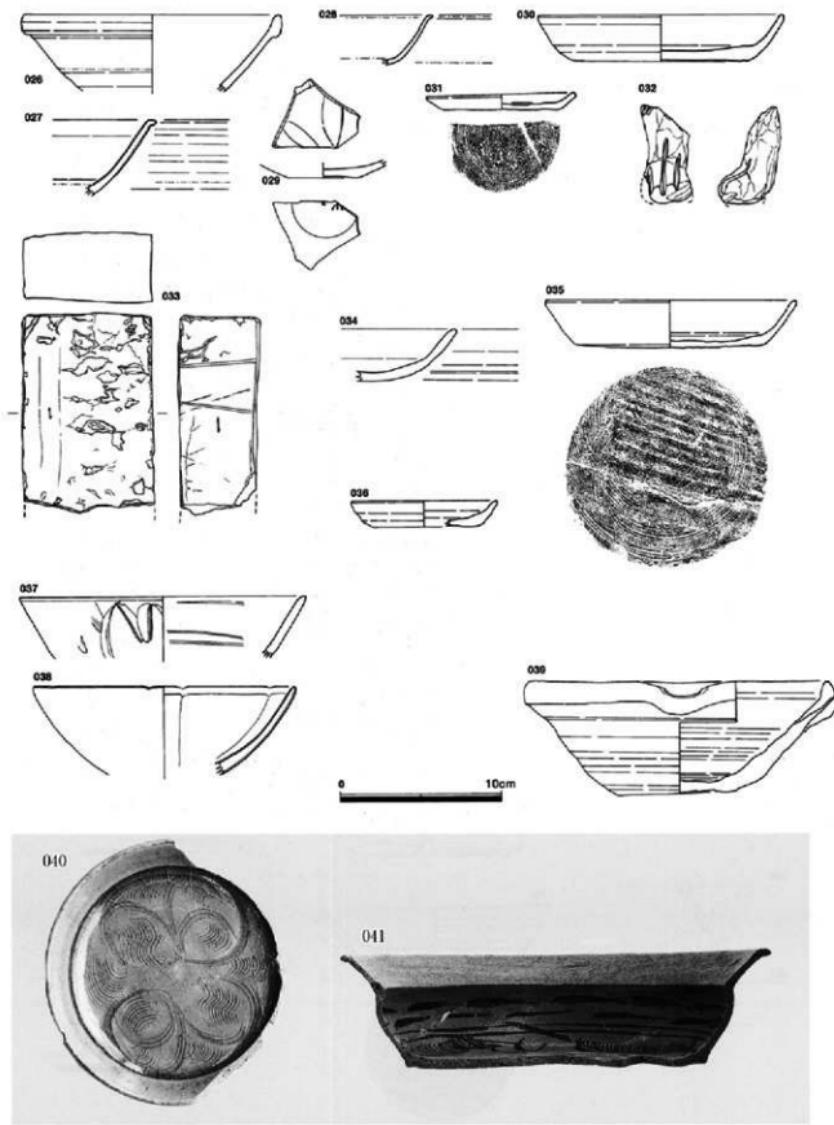
S K 0 2 3 9 (第21図) I 区南西側に位置する。平面梢円形を呈し、長径125cm、短径59cm、深さ54cmを測る。断面逆台形を呈す。覆土は炭化物を含む灰褐色砂質土で遺構上半に土師壊・土師皿等多くの遺物を含む。遺物は壁際に大きな個体を並べたのか中央には小さな皿や破片が多い。遺物包含層はレ



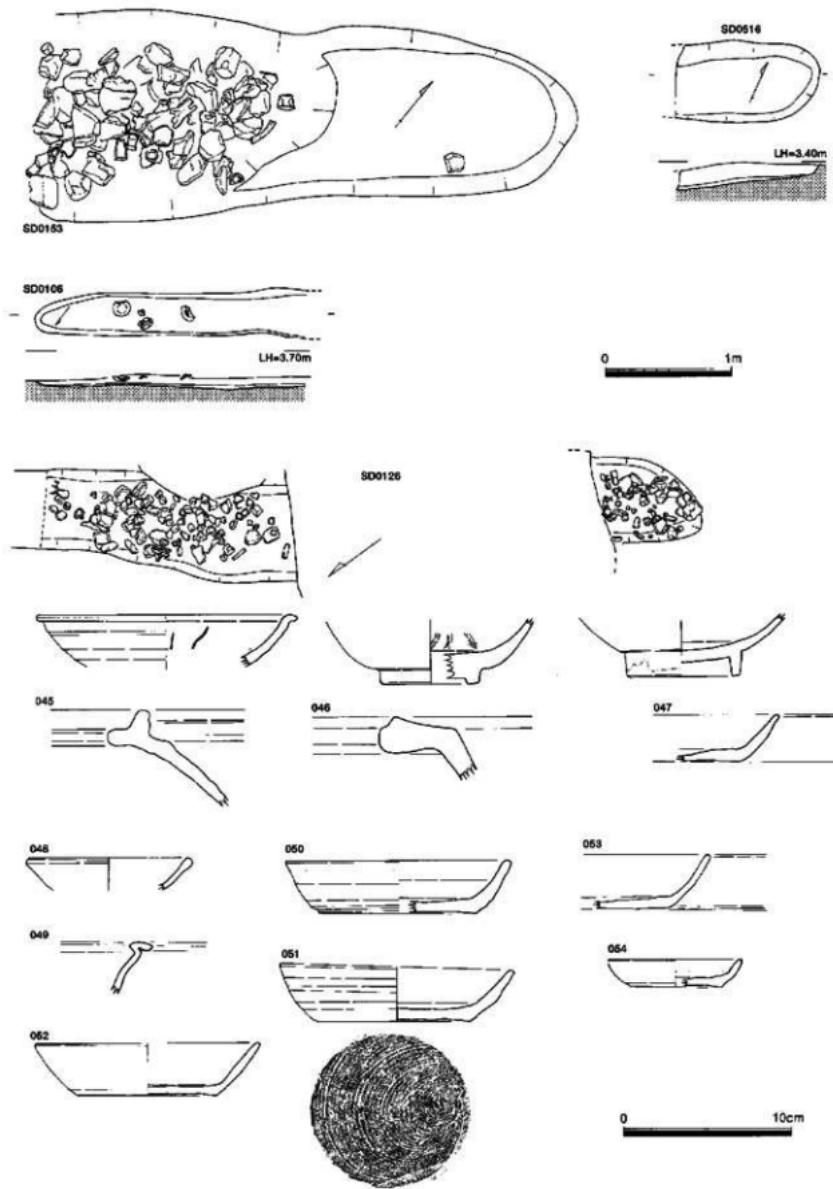
第9図 第1面土坑出土遺物実測図I (1/3)

ンズ状の堆積をなし、土坑の埋没途中に一括廃棄されている。土器に混じってシカの肩甲骨が出土、また魚鱗やカキ殻が多く出土。土師皿の下からはアビビ類の殻が出土している。魚鱗は遺存状態が悪く取り上げることはできなかった。カキ殻は3cm~6cmを測る。調査時点では気づかなかったが魚鱗の出土状況の写真を見るとその中に連結した魚類の椎骨を数本みることができる。鱗を落とした後二枚に下ろして骨を捨てたものと思われる。出土遺物（第22図192~201）。192~193は白磁。195は白磁壺である。196は瓦器椀。197~199は土師器壺。197は灯明皿である。200・201は土師器皿。

S K 0 5 2 2 (第21図) 木枯墓と思われる。II区南西側に位置する。擾乱等の削平をうけ西側のみの遺存である。上面で梢円形の掘り方を検出したが掘り下げの途中で細長い長方形の掘り方を確認した



第10図 第1面土坑出土遺物実測図Ⅱ (026~039) 1/3



第11図 第1面溝および出土遺物実測図 (1/40・1/3)

ので下層のみであるが上層実測を行った。西端で小山状の炭化物層があり、床面直上にも炭化物層がみられる。東側では暗灰色砂質土のなかに薄い暗灰色粘質土がレンズ状に堆積している。床面の炭化物層が棺蓋の痕跡であろうか。床面から5cmほど浮いて土師皿（糸切り）が出土したがこれらは上からの落ち込みと思われる。東端では床面で完形の青磁平底皿（I-2類）が出土した。

S K 0 5 2 8 (第13図) II区西側に位置する。平面楕円形を呈し長径159cm、短径95cm、深さ89cmを測る。断面逆台形で東端に段がつく。覆土中から白磁碗IV類、V類、VI類、白磁平底皿のVI類、VII-1類、VIII-1類が出土した。白磁碗のIV類は胎土、釉とも細かく、成形も丁寧である。その他に土師器壺と皿（糸切り）や竈片、縄目タタキと布目圧痕の平瓦と粗い斜格子の丸瓦片が出土した。

S K 0 5 3 4 (第13図) II区南側に位置する。東側は削平されているが平面楕円形を呈し径170cm、深さ56cmを測る。

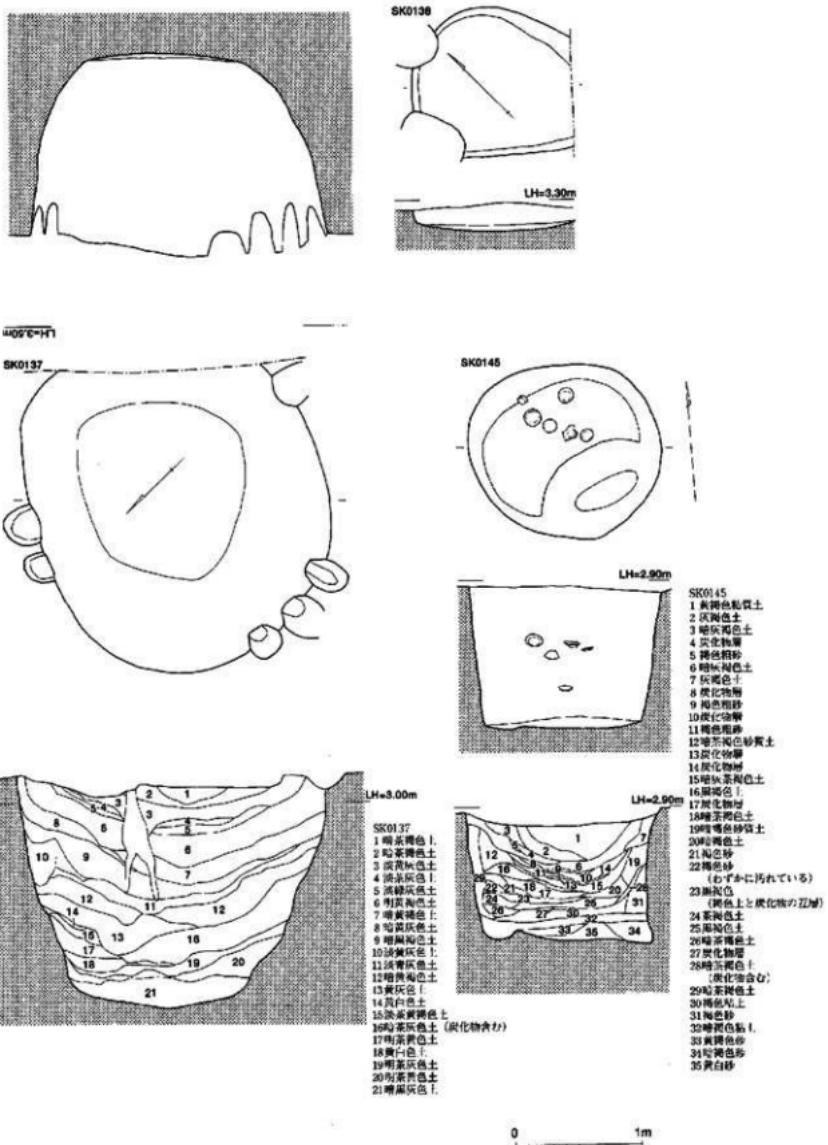
S K 0 6 9 5 (第14図) II区東側に位置する。表面で検出できなかったが、掘り下げ中に遺物が集中して出土したので上坑と判断した。平面は楕円形を呈し長径146cm、短径約90cm、深さ32cmを測る。断面はレンズ状を呈す。土師器壺を多く含みそれを横すように5~20cmの角礫が東側に集中して含まれる。遺物は陶磁器を含まず上師壺、土師器壺・皿（糸切り）などである。祭祀の一括廃棄と思われる。11世紀後半か。

S K 0 7 1 6 (第5図) III区北側に位置し北側を702に切られる。平面楕円形を呈し長径約260cm、短径196cm、深さ132cmを測る。断面は逆台形を呈す。貯蔵用堅穴か。出土遺物(第16図086~088)。086・087は白磁碗である。088は十師皿である。

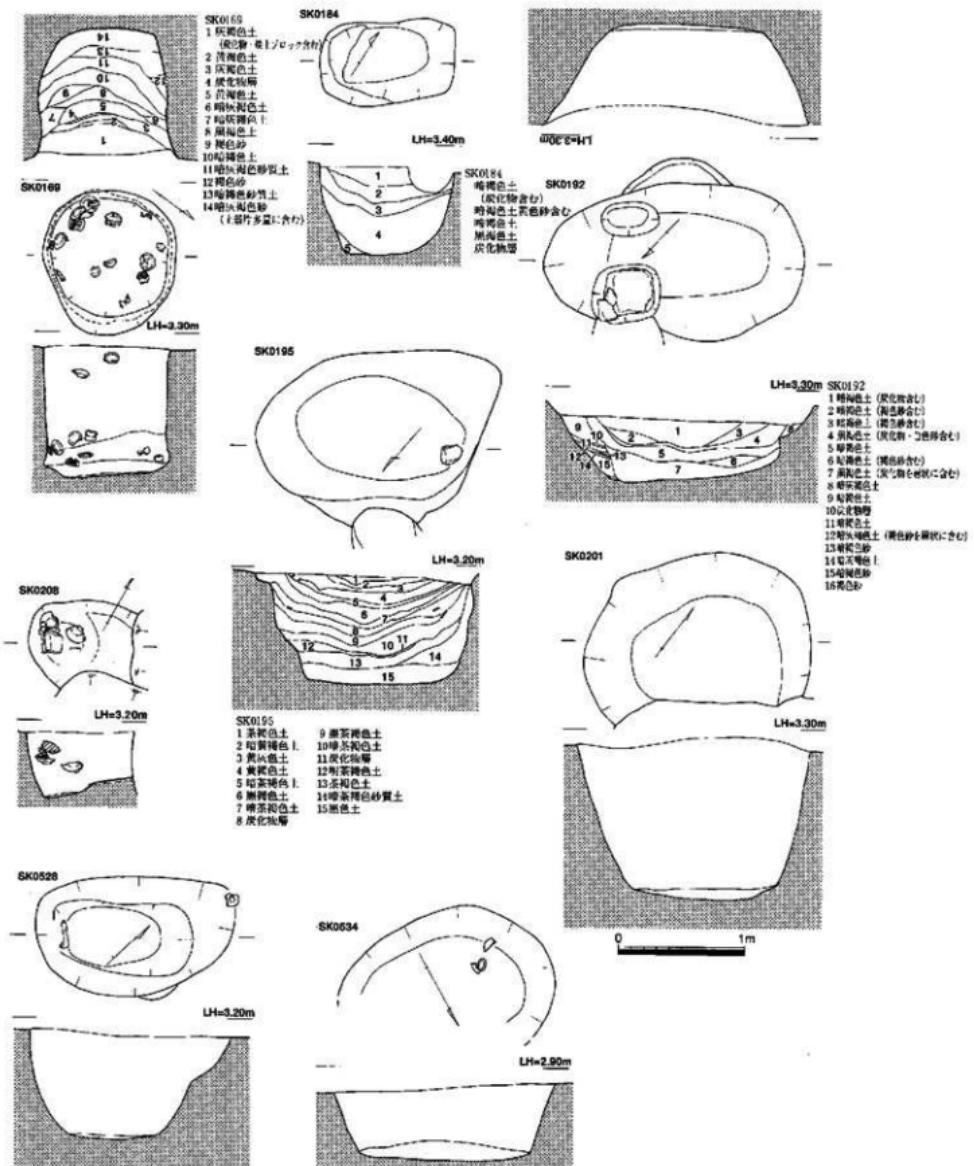
S K 0 7 2 0 (第14図) III区南端に位置する。南側が調査区外に延びるが現状で長径254cm、短径約140cm、深さ136cmを測る。断面箱形を呈す。覆土上半から径10~20cmの礫が多く出土するとともに、土師壺約80枚以上、土師皿50枚以上、白磁碗40枚以上と多量の遺物が出土した。出土遺物(第17~19図094~172)。094~116は白磁碗である。117~128は白磁皿、129~132は青白磁の合子。133は白磁四耳壺である。134は褐色版である。復元口径6.9cmを測る。胎土は須恵質の暗赤褐色である。135は短口壺で復元口径1.75cmを測る。肩部から頸部にかけて横縞褐色の釉を施す。胎土は灰褐色で砂粒多く含む。136~139は同安窯系青磁碗である。140は褐釉の盤、140~145は瓦器壺で短い高台が付き、横方向にミガキを施す。146~153は上師器壺。回転糸切りで153は口縁に煤が付着。154~167は上師器皿。糸切りで板状圧痕あり。168~169は須恵質の磚。168は厚さ2.8cmを測る。上下の面は粗いナデを施す。側面は木の圧痕があり、板を当てて成形し、その後軽くナデしている。広い面の片面が軽く磨耗しており、床に敷かれていた可能性がある。169~170は厚さ5cmと厚く煉瓦状を呈す。169は表面を軽くナデ調整を施すがひび割れ、植物圧痕がみられる。横側面のみが磨耗している。170は土師質の磚である。6面のうち3面のみ表面が残っているが、いずれも磨耗して砥石状をなす。しかし、砥石によく見られる部分的な強い磨耗や1方向の研磨痕はみられない。168~169の一面のみの磨耗にたいし、170の3面の磨耗は建物や道路敷きとしての利用の仕方でつくものとは思えない。171~172は棒状土製品である。1面が強く焼け白色化し、その周辺と側面の一部が赤化している。172もほぼ同じであるが断面三角を呈す。炉の構築材と思われる。

S K 0 7 3 8 (第14図) III区中央北寄りに位置する。平面は楕円形で長径216cm、短径178cm、深さ128cmを測る。断面は箱形を呈す。覆土は炭化物・焼土や白色砂を薄い層状に含むレンズ状の堆積で、下層はやや粘性をおびる。貯蔵用堅穴を廃棄土坑に転用か。出土遺物(第20図173~179)。173~176は白磁碗である。177は土師器壺、178~179は糸切りの土師器皿。

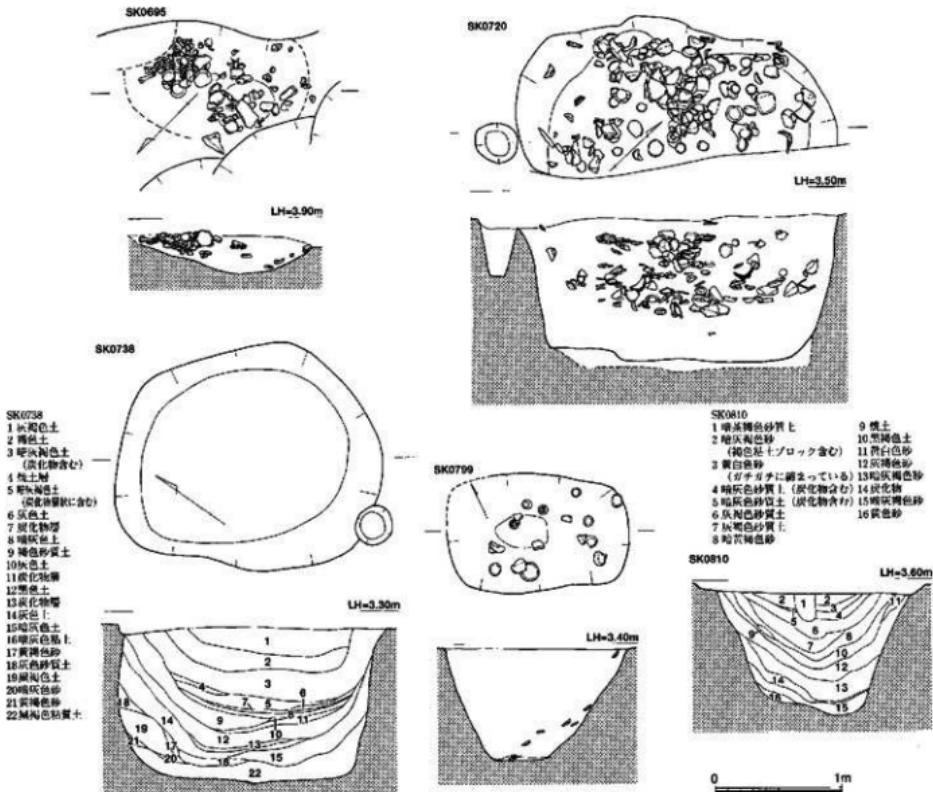
S K 0 7 9 8 (第21図) III区西端に位置する。長径135cm、短径113cm、深さ78cm。底面で完形に近い



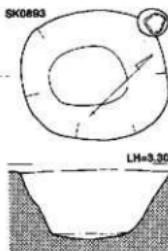
第12図 第2面十坑実測図 I (1/40)



第13図 第2面上坑実測図II (1/40)

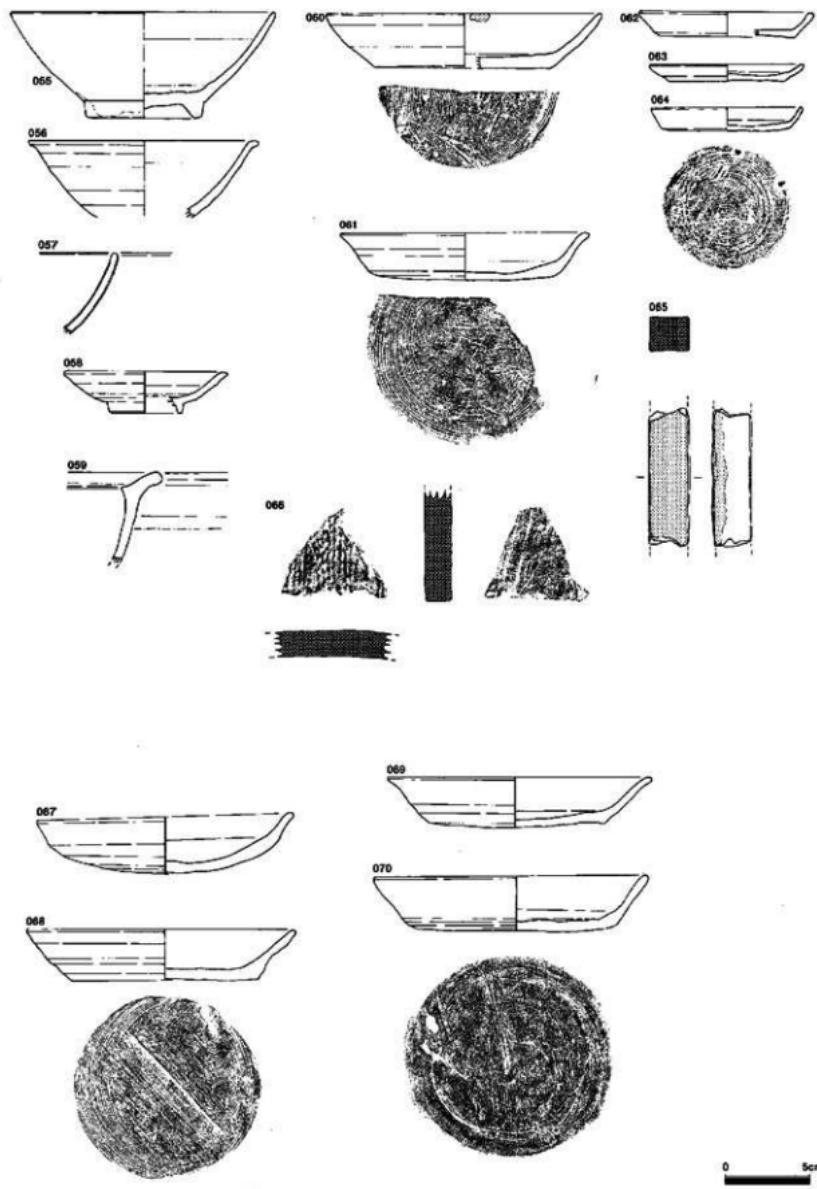


第14図 第2面土坑実測図Ⅲ (1/40)

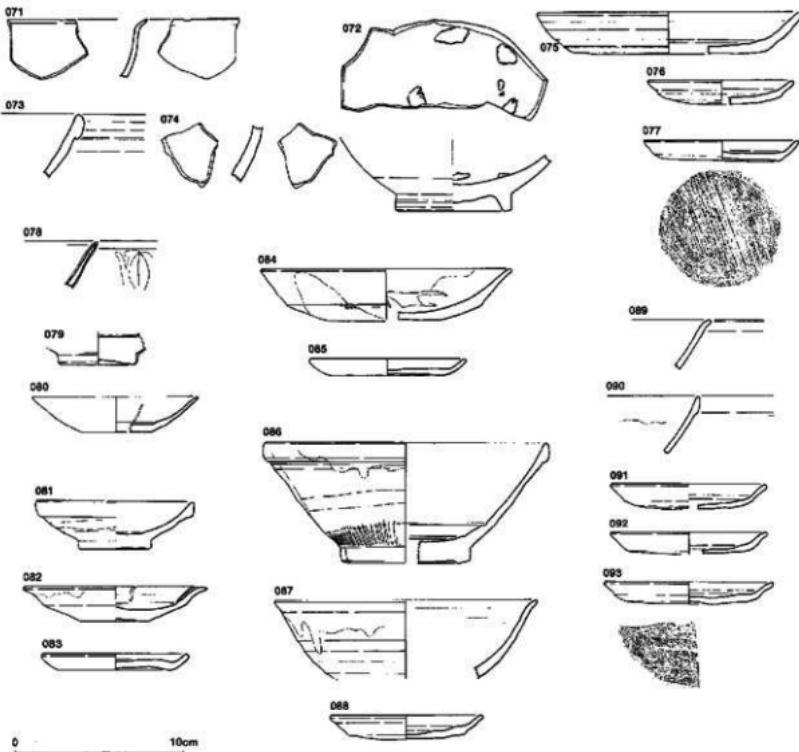


平瓦1枚とウシの左右下顎骨と寛骨、尺骨が出土した。いずれも解体時に廃棄される部分ではあるが、橈骨や胫骨、中手・中足骨など尺骨同様廃棄されやすい部分がないことや下顎骨が左右分離していることから解体直後の廃棄ではなく、祭祀に使用された可能性がある。瓦が板とすれば建物建設時の祭祀の可能性は考えられないだろうか。出土遺物（第22図207・208）207は瓦片である。底面で出土した。黒灰色を呈し斜格子のタキを施す。208は土師壺である。

S K 0 7 9 9 (第14図) III区西端に位置する。平面長方形を呈し長径143cm、短径93cm、深さ87cm。断面は鐘鉢状を呈す。覆土は東から廃棄された土師器と炭化物を多く含む黒褐色土が流れ込み、その後炭化物や焼土を含む砂質土が水平に堆積している。遺物は白磁碗IV類、白磁皿I - 1類、龍泉窯系青磁平底皿I - 2類、土師器皿（糸切り）、土師器皿（24枚以上）などがあ



第15図 第2面土坑出土遺物実測図 I (1/3)



第16図 第2面土坑出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

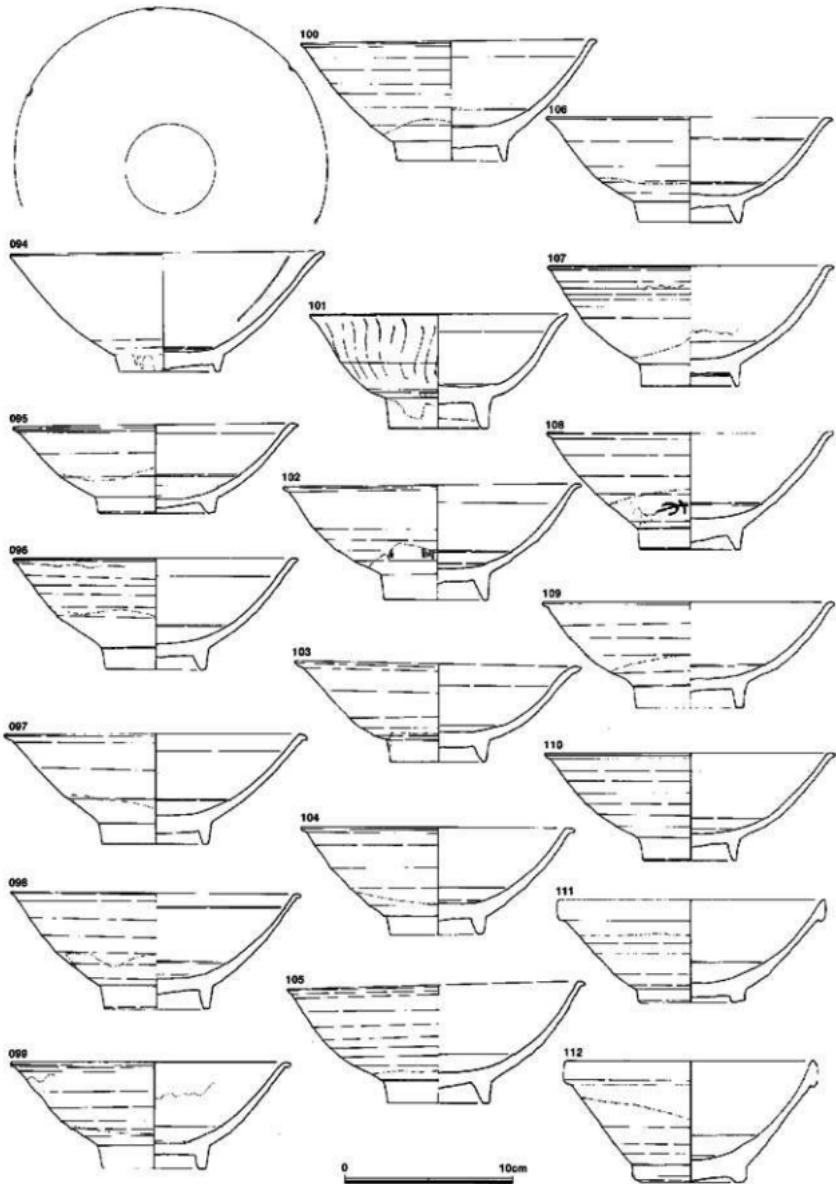
る。上師器皿は径が9.2~9.4cmと8.0cmの2つに分けられる。いずれも糸切りで板圧痕あり。

S K 0 8 8 6 (第21図) Ⅲ区中央部に位置する。造構検出では見つけられなかったが掘り下げ時に土師皿が8枚まとめて出土したため造構番号をつけ取り上げた。出土遺物は土師器皿(糸切り)が1枚、上師器皿(糸切り、板状圧痕あり)が7枚出土している。土師皿径は8.4~8.6cmを測る。

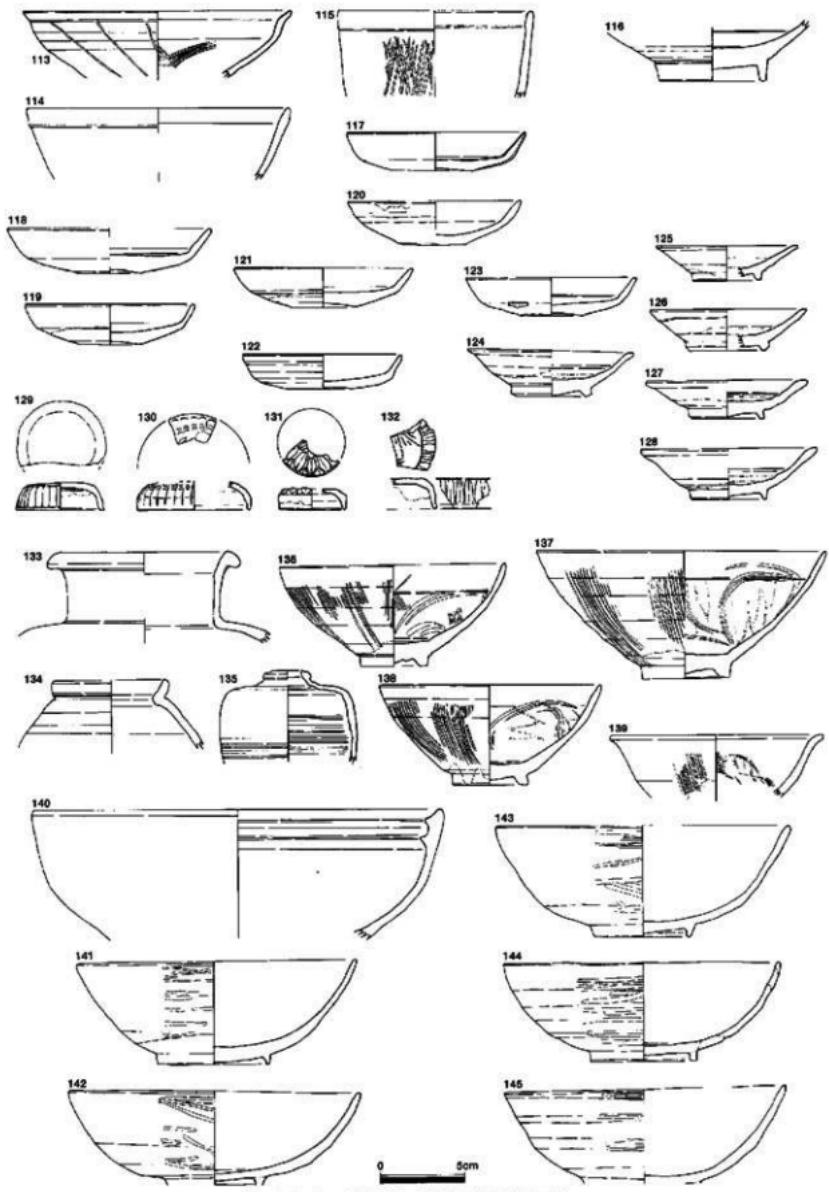
S K 0 8 9 3 (第14図) Ⅲ区北東側に位置する。平面隅丸の長方形で長径114cm、短径103cm、深さ54cmを測る。断面逆台形を呈す。出土遺物(第20図180~191)。

掘建柱建物

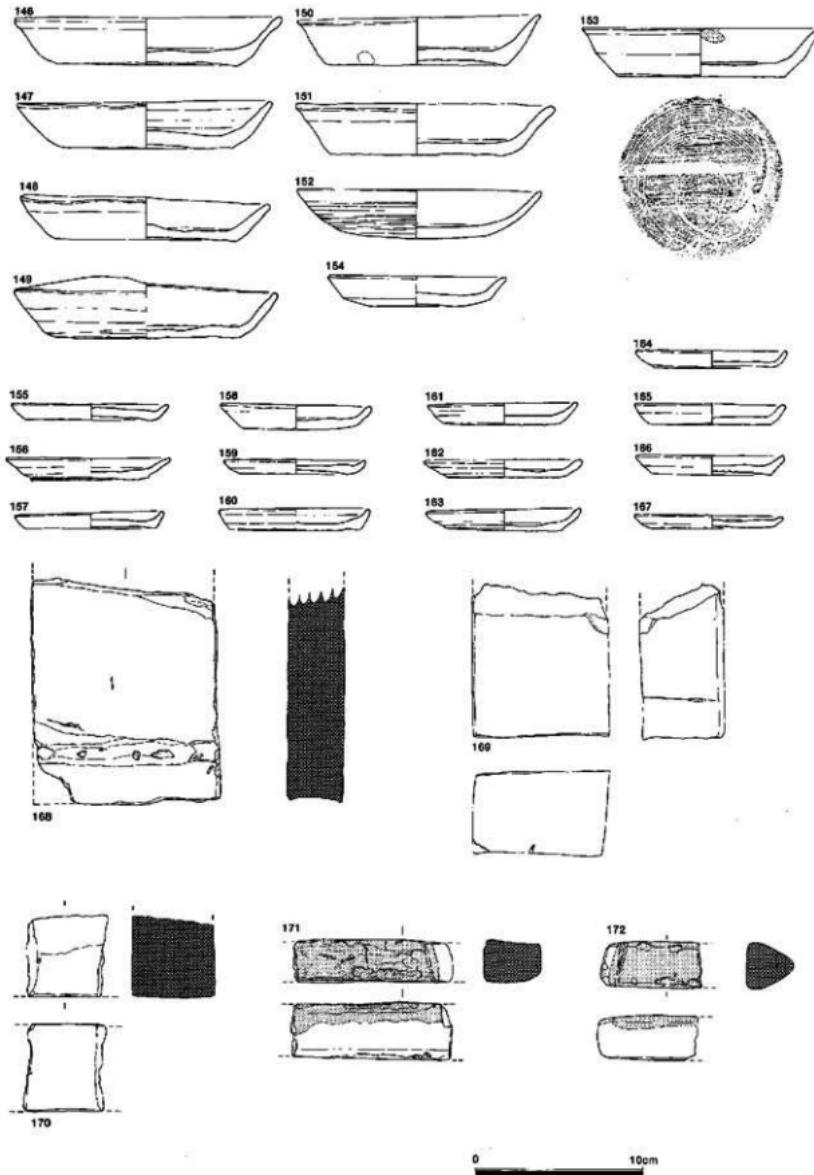
S B 0 0 1 (第5図) Ⅲ区の南東端に位置する。4間分確認した。北西側で検出した道路側溝に平行する。径40~50cmの柱穴で床面に10cmほどの礫を敷き詰めて根石としている。柱間は約2mを測る。北西側に続かないため、南東側に延びて建物となると思われる。構とすれば北西側の道路との境界柵としての役割が想定される。S K 0 7 2 0 を切っており13世紀以降であるが、道路が14世紀前半の開通とされており、14世紀まで降る可能性がある。



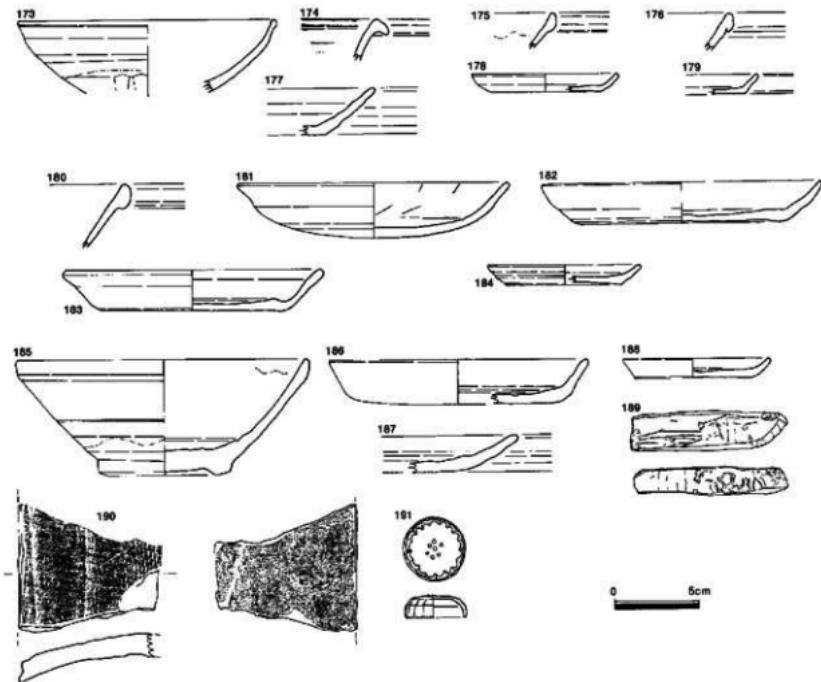
第17図 第2曲土坑出土遺物実測図III (1/3)



第18図 第2面土坑出土遺物実測図IV (1/3)



第19図 第2面上坑出土遺物実測図V (1/3)



第20図 第2面土坑出土遺物実測図VI (1/3)

溝

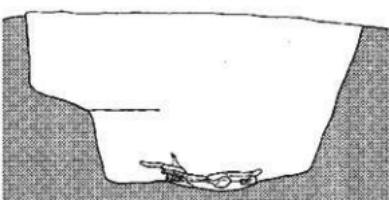
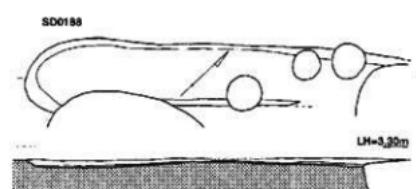
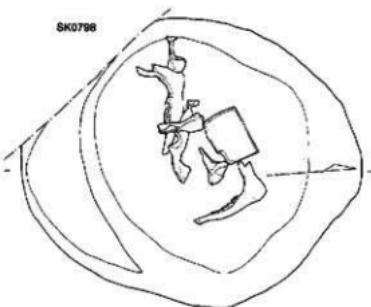
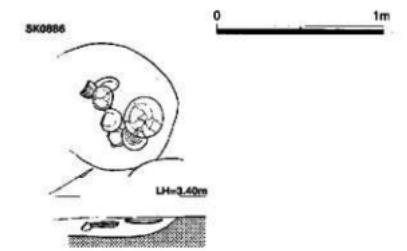
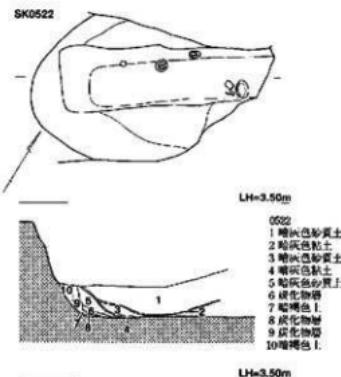
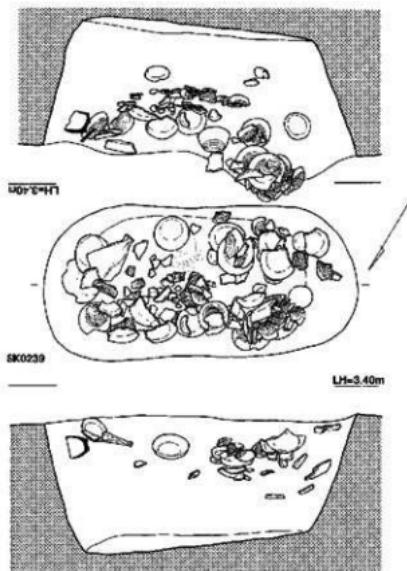
S D 0 1 4 1 (第5図) I区南端で検出した。ほぼ調査区の端に沿う感じで東西方向に延びる溝が段落ちである。深さは東側で43cm、西側で約35cmを測る。

S D 0 1 8 8 (第5図) I区東側で検出した。1面のS D 0 1 2 6 のわずかに北側に位置し、掘り残しの可能性もある。他の溝と同様に道路の側溝であろう。深さ約5cmを測る。

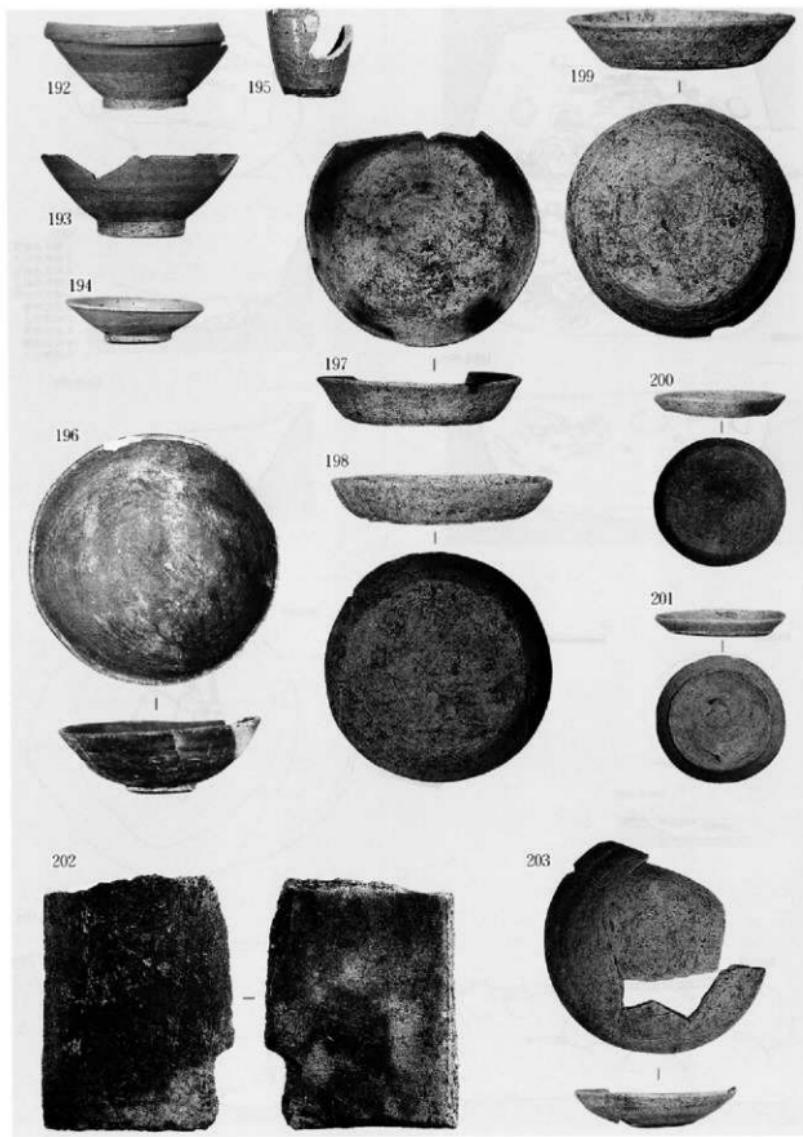
井戸

S E 0 1 7 1 (第23図) I区中央北側に位置する。S D 0 1 8 8 を切る。平面はいびつな方形で長径234cm、短径213cm。据方は底部に向かって緩やかにすぼまる。検出面から150cmで湧水点に達し、その面で方形の井戸枠の痕跡を確認した。遺存状態は悪い。その20cm下で湧水が激しくなり壁が崩壊し始めたため掘り下げを中止した。遺物は多量の白磁碗IV類と共に白磁皿VI-1類、土師碗を含む。12世紀代と思われる。

S E 0 6 7 1 (第23図) II区東側に位置する。円形を呈し径172cm、検出面からの深さ122cmを測る。検出面から51cmで長方形の井戸枠の痕跡を確認した。現状で長径109cm、短径88cmを測る。井戸枠は土圧でかなり中央側にせり出している。検出面から74cmで径63cmの半球状の痕跡がみられ、これが井筒底と思われる。井戸枠は最下部までは達しておらず、広がりながら底上23cmの高さで止まる。8世紀



第21図 第2面土坑実測図IV (1/30、SD0188は1/40)



第22圖 土坑出土遺物圖VI

後半の須恵器高台付き壺や土師器壺が出土した。

S E 0 6 8 0 (第23図) II区西端に位置する。径260cmを測る。掘り方は掘り鉢状にすばまる。検出面から200cm掘り下げたところで井筒の掘り方らしきものが見え始めたが湧水による崩壊で掘り下げるることはできなかった。遺物は白磁碗類の他に越州窯青磁片や古墳・古代の遺物も多い。井筒からガラス小玉が出土した。

S E 0 7 6 7 (第23図) III区北端に位置し径292cm、深さ144cmを測る。底面から更に120cm、深さ21cmの円形の掘り込みがあり井戸枠痕と思われる。底部の標高が2.35mで現湧水点より90cm以上高い。出土遺物 (第24・25図) 204~209は白磁碗である。210~212は白磁皿、213は白磁壺である。214は黄褐色壺で胎土灰色。215・216は瓦器碗で内面全面にミガキを施す。217~224は上師器壺である。219は内外面とも口縁に焦が付着している。223はヘラ切りで224は指オサエ。225~237は土師皿で235がヘラ切りの他は糸切り板状圧痕がみられる。238は滑石製の石錐、239は滑石製品である。

4. 第3面の調査

1) 第3面検出遺構と出土遺物

土坑

S K 0 3 1 0 (第26図) I区中央北東側に位置する。平面は楕円形で長径184cm、短径約142cm、深さ114cmを測る。断面は逆台形で東側に床面から17cmの深さの掘り込みを持つ。検出面から50cmの高さで疊・土師壺等がまとまって出土した。出土遺物 (第27図240~245)。240は白磁碗、241は白磁平底皿である。242は褐釉の鉢で径37.8cm、器高15.2cmを測る。茶褐色を呈し、大粒の白色砂を多量に含む。部と胴部下半に墨書がみられる。243・244はヘラ切りの土師器。245は瓦質の壺もしくは蓋である。内外面とも細かなミガキを施す。

S K 0 3 3 3 (第26図) I区北東端に位置する。東端が調査区外に延びるが現状で長径143cm、短径112cm、深さ105cm。覆土は炭化物を含む砂質土がレンズ状に堆積する。出土遺物 (第27図246~255)。246~248は白磁である。249~251は黄褐色の盤、254は滑石製品で第36図328と同じくおもりであると思われる。

S K 0 3 7 8 (第26図) I区南東側に位置する。平面楕円形で長径180cm、深さ42cmを測る。白磁碗IV類黄褐色盤・土師器壺・皿(糸切り)が出土している。12世紀前半か。

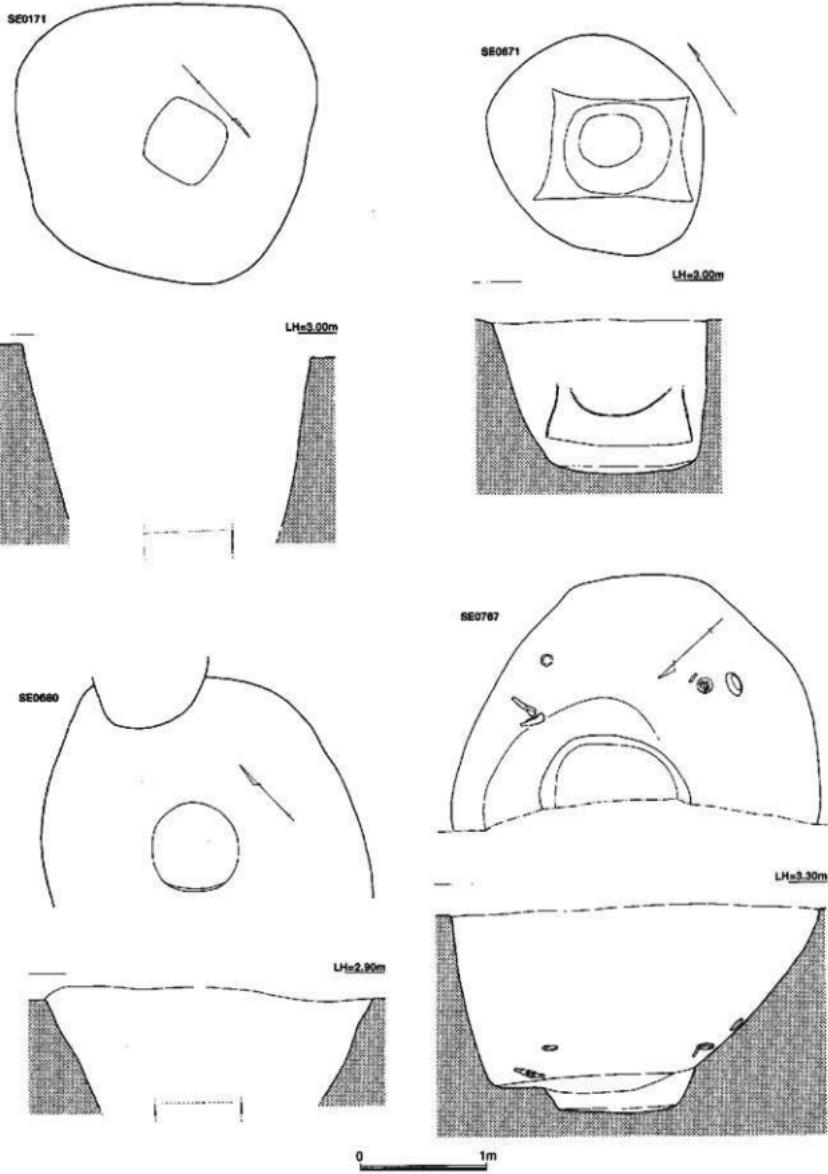
S K 0 4 5 6 (第26図) I区北端に位置する。S D 0 4 5 5 を切る。北側が調査区外に延びるが現状で径112cm、深さ114cmを測る。覆土は暗褐色砂質土と黄褐色砂の互層である。一部炭化物を含んでいる。主に東側からの流れ込みである。

S K 0 4 7 8 (第26図) S K 456に切られる。南側が調査区外に延びるが現状で252cm、深さ52cmを測る。出土遺物には陶器類ではなく、上師器碗高台部小片、綠釉細片、土師器壺片(糸切り)、のほか8世紀後半の須恵器高台付き壺や須恵器大甕片が出土している。

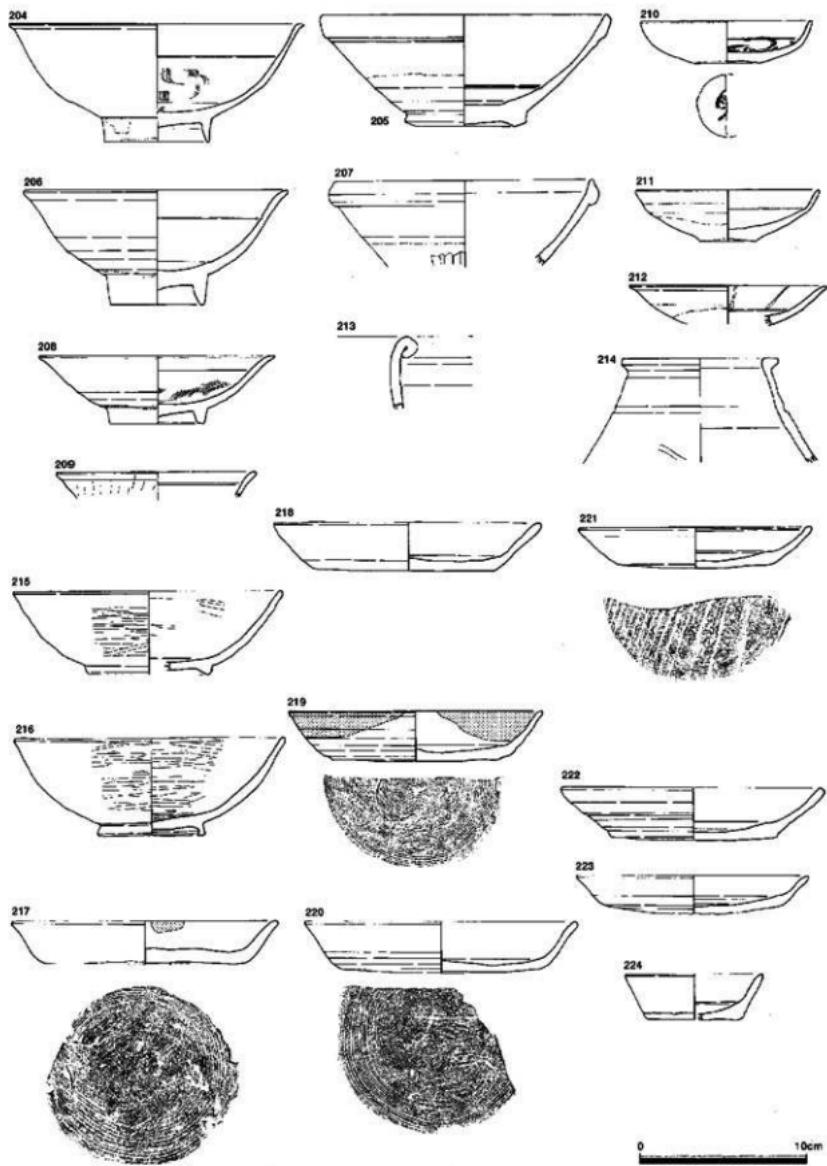
S K 0 7 0 3 (第26図) II区西端に位置する。S E 0 7 0 2 に切られる。平面楕円形で径106cm、深さ現状で61cmを測る。断面は逆台形を呈す。覆土は暗灰色土を主とし、間に薄い炭化物層をレンズ状に含む。須恵質瓦片や白磁碗IV-1類、土師器壺・皿(ヘラ切り)が出土した。

S K 0 7 0 5 (第26図) II区西側に位置する。北側は削平されているが現状で径154cm、深さ45cmを測る。断面は浅皿状を呈す。出土遺物 (第27図256~260)。256~258は白磁碗、259は黒釉盤、260は土師器壺である。

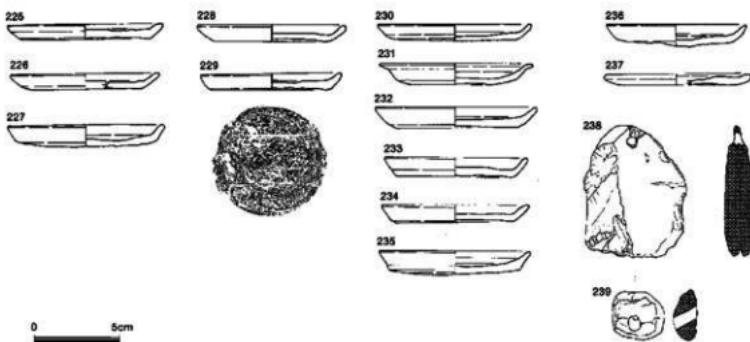
S K 0 8 6 5 (第12図) III区北西端に位置する。平面は卵形で長径193cm、短径142cm、深さ109cm。覆



第23図 第2面井戸実測図 I (1/40)



第24図 第2面井戸出土遺物実測図1 (1/3)



第25図 第2面井戸出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

土中から白磁碗片と共にウシ下顎骨片やシカの指骨・桡骨片が出土している。シカの指骨は基節骨・中節骨・末節骨が連結しており、この場で解体され捨てられたものである。出土遺物は白磁碗IV-1類、Ⅳ類土師器坏・皿(糸切り、ヘラ切り)である。

S K 0 9 8 8 (第12図) III区中央に位置する。平面は隅丸長方形を呈し長径103cm、短径93cm、深さ92cmを測る。断面逆台形を呈す。白磁碗IV-1類、土師器坏・皿(ヘラ切り)、罐片、須恵器長頸壺、瓦器柄が出土している。

S K 0 9 9 6 (第12図) III区の北側に位置する。S E 0 8 6 7 に切られる。円形で径136cm、深さ103cmを測る。白磁碗Ⅳ-2・IV-1類、土師器坏(ヘラ切り)が出土。

S K 1 1 2 4 (第26図) III区南東側に位置する。S E 0 9 6 9 に切られる。径50cm深さ14cmを測る。断面掘り鉢状を呈す。鉄製の街が出土した(第36図)。時期不明。

溝

S D 0 4 5 5 (第6図) I区東側に位置する。幅約90cm、深さ最大で43cmを測る。現在の町割りに平行する。ただし現場は東側に向かって傾斜しており、等高線に沿っている可能性も考えられる。8世紀後半の須恵器高台付き坏、黒色土器A、土師器皿(ヘラ切り)、綠釉片含む。

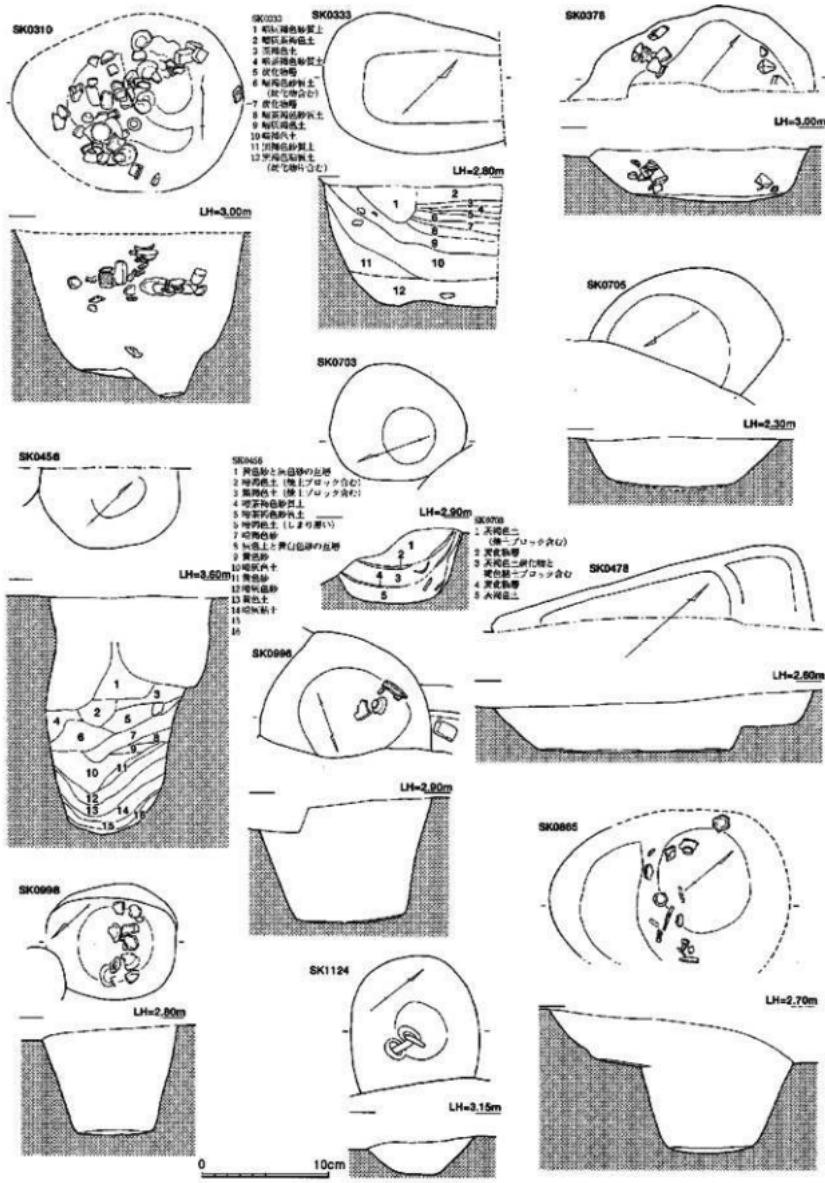
S D 0 4 8 8 (第6図) I区北東端に位置する。北東に向かって低くなってしまっており、溝ではなく深い段落ちの可能性もある。白磁四耳壺(12C前)、横楕釉盤、土師器坏(ヘラ切り)、の他に8世紀後半の須恵器高台付き坏、高坏などが出土している。

S D 0 6 7 0 (第5図) II区中央に位置する。土師器皿、椀、瓶取手が出土している。

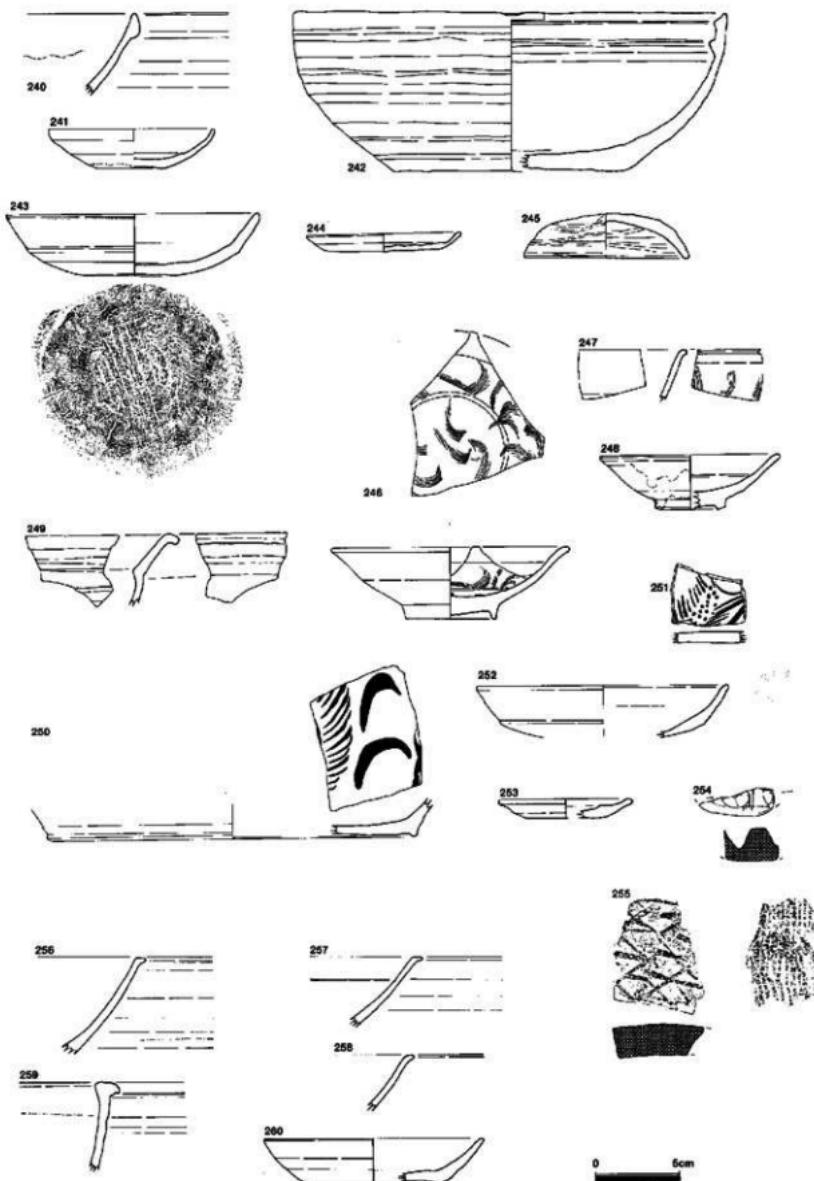
S D 0 9 3 3 (第6図) III区南側で検査した。現在の地割りに平行する。幅50cm、深さ40cmを測る。北側の85次調査では調査区外にあたるため、確認されていない。S D 0 4 5 5 や S D 0 9 9 9 と平行す。12世紀前後の町割りか屋敷を巡る溝などの可能性が考えられる。

S D 0 9 9 9 (第6図) III区中央部に位置する。幅約180cm、深さ90cmを測る。断面は逆台形。S D 0 9 3 3 と同様85次調査でも確認されている。出土遺物(第28図261~266)。261・262は越州窯系青磁碗。263は耀州窯系青磁碗で外面に蓮弁の模様がある。釉は外面が薄緑色で内面は黄褐色、胎土は灰白色できめ細かい。唇付きには釉掻き落とし。265~266は平瓦。265は土師質で斜格子のタタキと粗い布目の圧痕がみられる。266は須恵質で布目の圧痕がみられる。

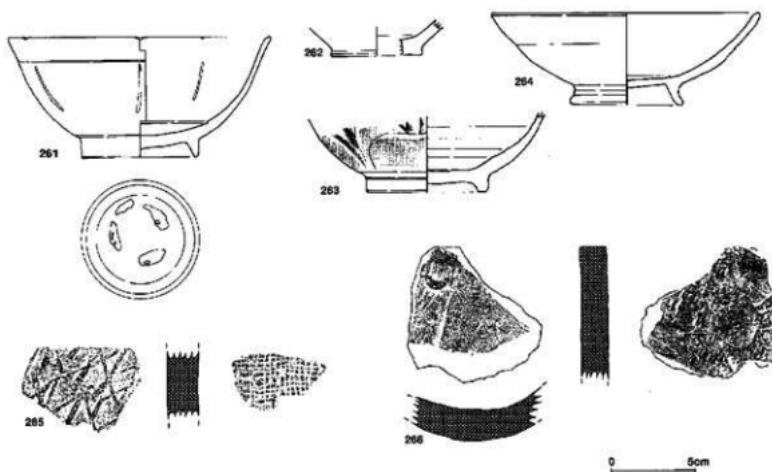
S D 1 1 4 4 (第6図) S D 0 9 3 3 の東側に平行する。遺構の切り合いで激しいので平面では確認



第26図 第3面上坑実測図 (1/40)



第27図 第3面土坑出土遺物実測図 I (1/3)



第28図 第3面十坑出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

できなかったが、調査区南端の土層で確認した。北端の土層では井戸のため確認できなかったが、他の溝と同様に北東側に延びるものと思われる。北側の85次調査区でも確認されている。(出土遺物第29図)。267~270は白磁碗である。271は白磁底皿、272~273は褐釉盤である。283は土師壺の外底部に墨書きがみられる。銘文は大筆とみられる。天に右側にも薄く墨痕があるがきわめて薄い。284~287は須恵質の平瓦片である。284は布日の正痕とタタキで両面とも上からナデを施す。285は粗い布目の圧痕である、286は格子タタキと布目圧痕である。厚さ1.8cmを測る。287は粗い格子目のタタキと細かな布目の圧痕がみられる。

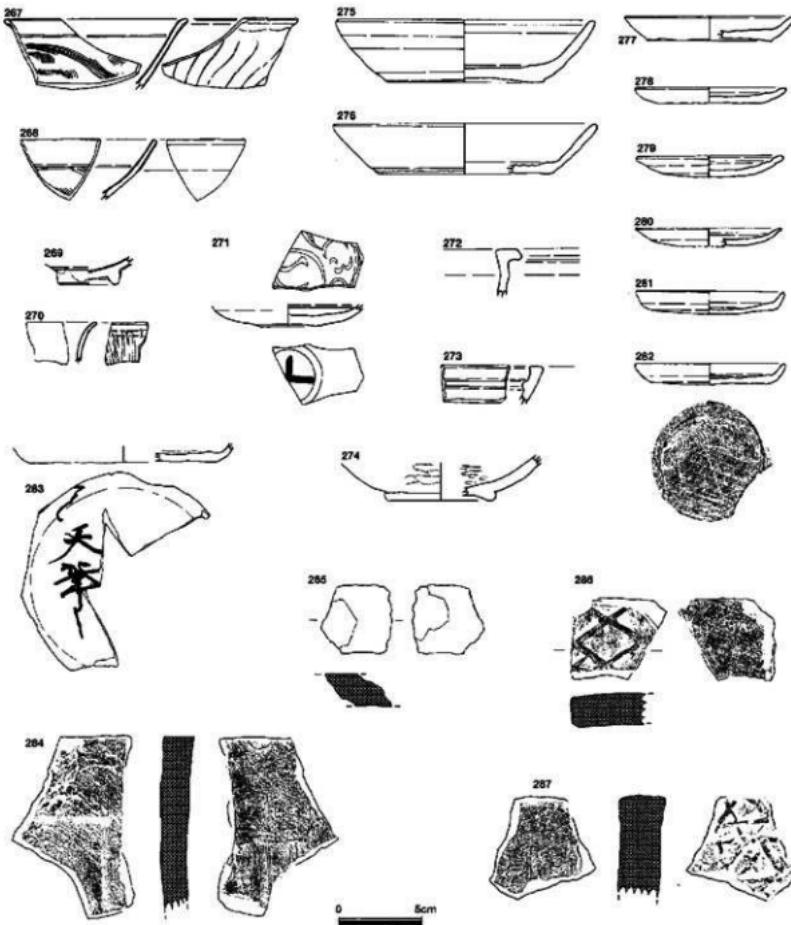
井戸

S E 0 3 1 1 (第30図) I 区中央南側に位置する。径236cm、深さ138cmを測る。南西側に底面から僅かに高い段を持つ。中央が一段円形に低いのは木枠を据えた痕跡と思われる。底面標高1.6mを測る。遺物は少なく土師器壺片が出土している。

S E 0 4 2 9 (第30図) I 区東端に位置する。S K 0 1 3 7 に切られる。径213cmを測る。検出面から120cmで円形の木枠を確認した。検出面から150cmで湧水が激しくなりそれ以上の掘り下げはできなかった。出土遺物 (第33図288~296)。288~292は白磁碗である。293は土師碗、294は土師器皿、295は青磁壺である。口径8.3cmを測る。釉はオリーブ色で薄く不透明、氷裂はみられない。胎土は灰色で白い斑点が多く見られる。296は白磁壺片である。

S E 0 4 8 1 (第30図) S E 0 4 2 9 に切られる。径224cmを測る。検出面から113cmで木枠を確認した。木枠は2重になっており、外側が1辺115cmの方形、内側が径85cmの円形を呈す。外側の木枠は検出面から137cmまで。下端部は1辺3cmほどの角材で補強している、内側の木枠は検出面から172cmの深さまで確認したが、湧水のためそれ以上の掘り下げはできなかった。土師器壺(糸切り)、須恵器高台付き壺が出土した。

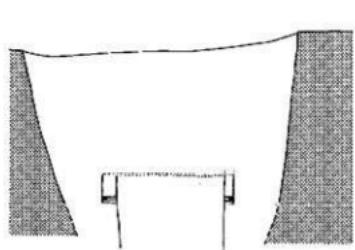
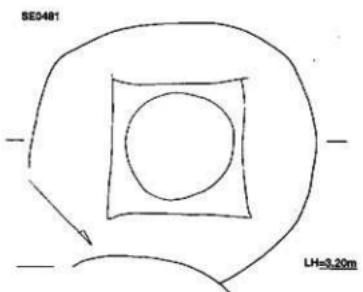
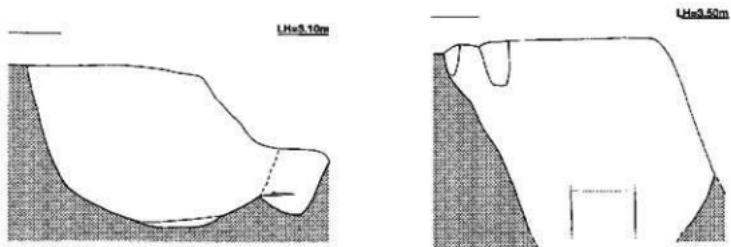
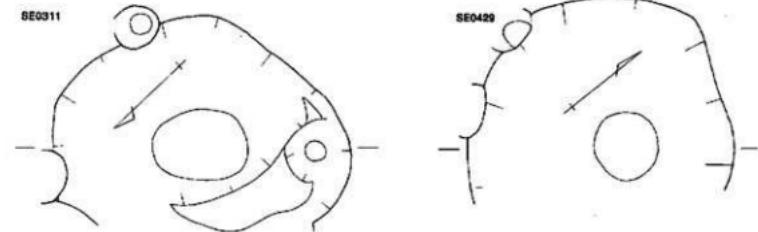
S E 0 4 8 4 (第30図) I 区の西側に位置する。S E 0 4 8 5 を切る。平面は隅丸の長方形で長径239cm、短径211cmを測る。検出面から157cmの深さで木枠を確認した。木枠は2重になっており外側は1



第29図 第3面土坑出土遺物実測図III (1/3)

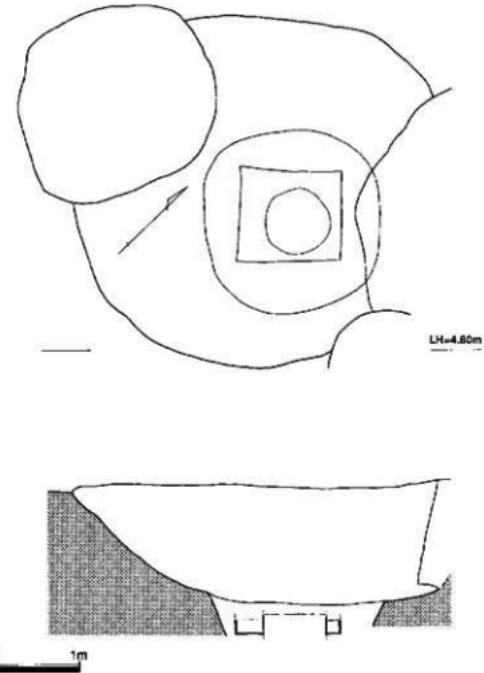
辺92cmの方形。板材の厚さは5cmから厚いところでは10cmを測る。南側中央の一部が内側に突き出す。内側は径55~72cmの楕円形を呈す。外側の枠は検出面から165cmの深さで無くなり、内枠は188cmまで確認したが、湧水が激しくなり掘り上げることはできなかった。遺物は陶磁器は少なくヘラ切りの上師器壺と皿が出土している。胎土、焼成共に良好である。

S E 0 4 8 5 (第31図) I区中央西側に位置する。径423cmを測る。深さ143cmまで半球状に掘り下げ、そこから径210cmの隅丸方形形状の堅穴を掘り下げている。検出面から160cmで井戸枠を確認した。井戸枠は2重になっており、外枠は1辺120cmの方形、内枠は径78cmの円形を呈す。外枠は検出面から180cmの深さでなくなる。その時点で湧水が激しく、それ以上の掘り下げはできなかった。出土遺物は8世紀後半の須恵器高台付き壺や壺蓋が多く出土し、竈片もある。白磁碗V-3類が1点のみ出土してい



0 1m

第30図 第3面井戸実測図 I (1/40)



第31図 第3面井戸実測図Ⅱ (1/60)

る。紛れ込みか。

S E 0 6 9 7 (第32図) II区
北東隅に位置する。平面楕円形を呈す。南側が円形に一段深くなつており、井戸枠を据えた痕跡と思われる。土師器碗 (9~10世紀) が出土。

S E 0 7 0 1 (第32図) II区
西端に位置する。平面円形で径283cmを測る。掘り方は底に向かって急激にすばまる。検出面から85cmで井戸枠を検出した。井戸枠は2重になつており、外枠は1辺が110~125cmの長方形、内枠は1辺が67~85cmの長方形を呈す。いずれも土圧のため、木枠が内側にせり出している。検出面から95cmまで掘り下げたが湧水が激しくなつたため、それ以上の掘り下げはできなかつた。出土遺物に陶磁器は含まれない。8世紀後半の須

恵器高台付き壺、壺蓋、須恵器大甕片、須恵器鉢、瓦の他に土師質の土錐を含む。古代か。

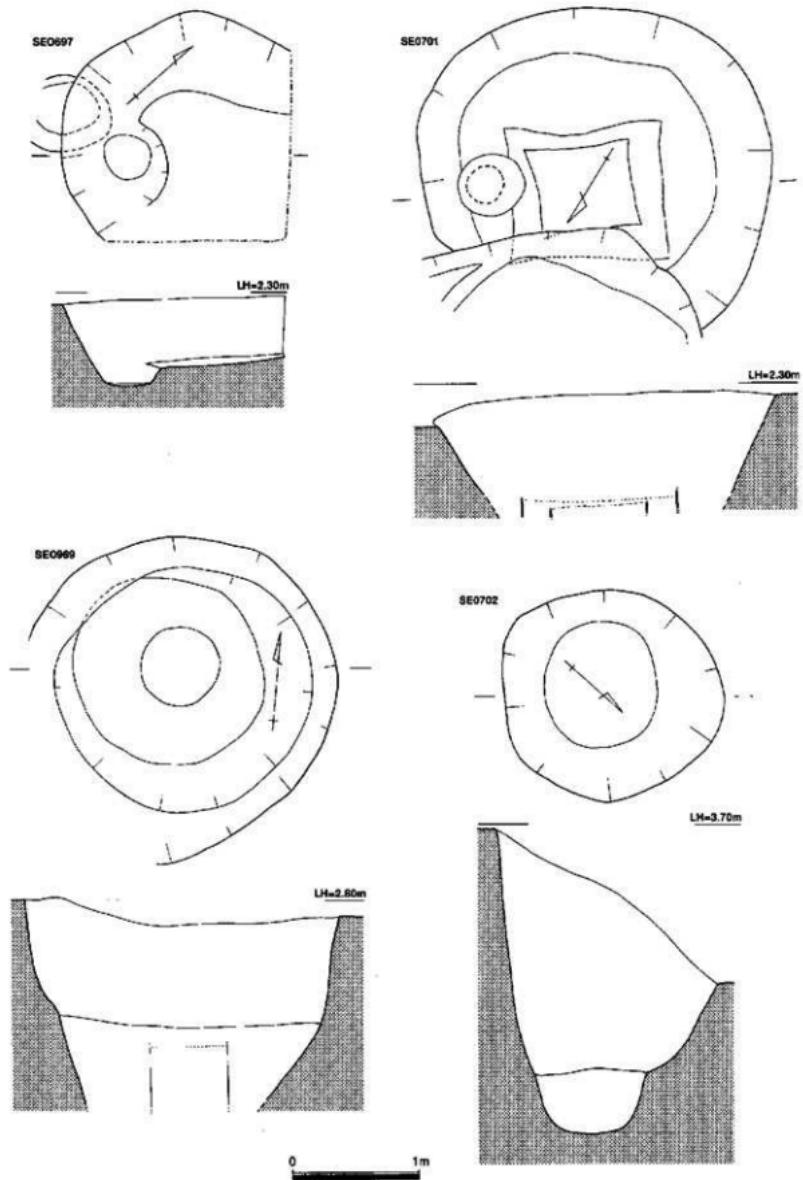
S E 0 7 0 2 (第32図) II区とIII区の境界である。平面は円形で径175cm、深さ241cmを測る。底から約50cmの高さで掘り方に段がつく。出土遺物は白磁碗IV-1類が多く出土。土師器類は少ない。近世の染め付けも少量出土するが紛れ込みか。

S E 0 9 6 9 (第32図) III区南東端に位置する。径約260cmの円形を呈す。検出面から126cmで円形の木枠痕を確認した。深さ160cmまで掘り下げたが湧水のためそれ以上掘り下げるることはできなかつた。出土遺物 (第33図297~303)。297は白磁碗で表面に煤が付着、298は白磁平底皿、299は須恵器高台付き壺である。301は土師器甕、302・303は須恵器の平瓦で302は縄目のタタキと布目压痕、303は格子目のタタキと布目压痕である。

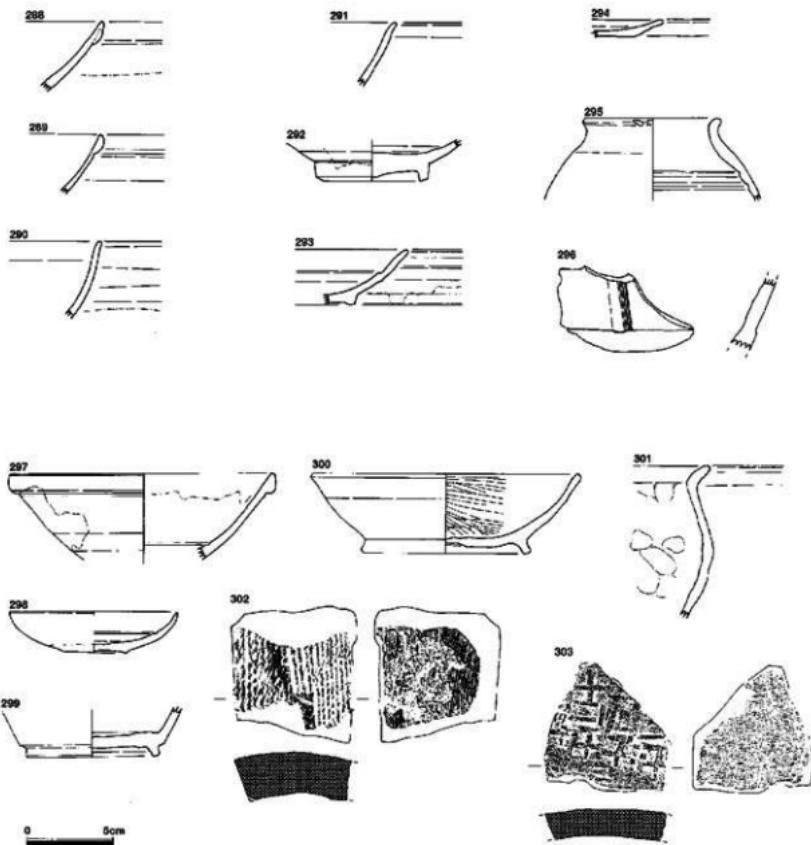
5. 中世以前の出土遺物

北側に隣接する85次調査では8世紀中頃の竪穴式住居など古代の遺構が確認されている。本調査区では古代 (8世紀末~9世紀初頭) の遺物しか含まない井戸もあるが実際に9世紀まで遡ると断定はできず確実な9世紀の遺構はない。しかし遺物は後世の遺構の中から多く出土している。304・305は須恵器高台付壺である。306は須恵器壺蓋である。器種としては須恵器高台付壺や壺蓋、須恵器鉢、須恵器大甕、土師器甕、甕片などが多く長頸壺の破片は少ない。

307~309は占墳時代初期の遺物である。この時期も遺構は確認できなかつたが遺物は多い。



第32図 第3面井戸実測図III (1/40)



第33図 第3面井戸出土遺物実測図1 (1/3)

307は土師器器台の坏部である。胎土は橙色を呈す。308は2重口縁壺である。口径21.2cm、器高30.3cmを測る。外面は口縁から頸部がナデ、胴部がハケ後ミガキ、内面がハケ後胴部はナデを施す。胴部は球形でわずかに上下に潰れている。器壁は全体的に5mm前後を測る。調査区の西端、地山である黄褐色砂の直上で検出した。周辺は暗茶褐色砂質土がわずかに窪みに堆積しており方形周溝墓の溝ではないかと精査したが確認できなかった。他にも古墳時代前期の遺物は調査区全体で出土しているが大きな破片や確実な造構は確認できなかった。309は土師壺の胴部である。

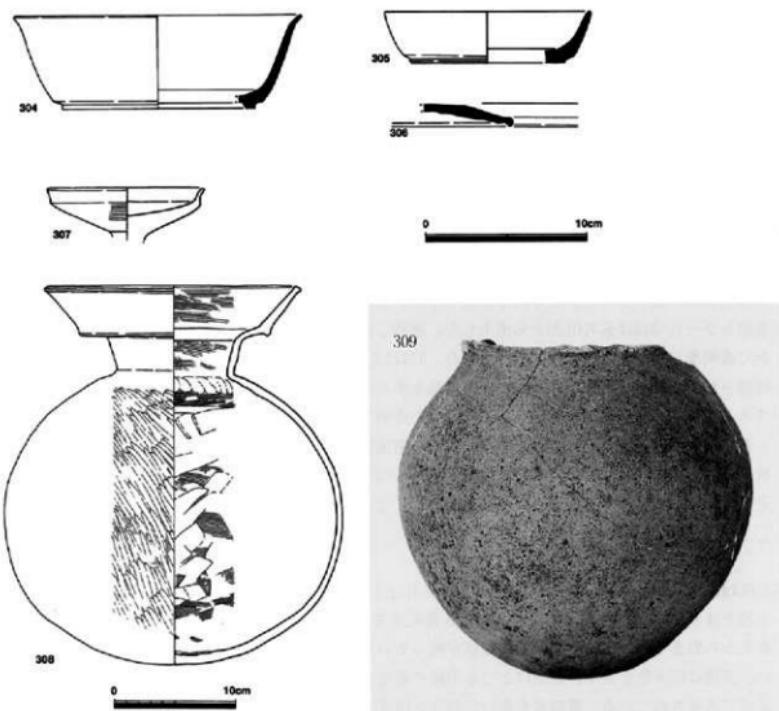
6. 鋳造関連遺物

310・311は坩堝として使用されている。310は中国製茶褐釉陶器壺である。口縁から頸部上半を欠く。底径10cm、最大胴径15.6cmを測る。釉は熱のため消失し、内外面とも頸部上半のみに残っているのみで、外面胴部には白色の粉状で斑に付着している。胎土は赤褐色を呈し、白色砂をわずかに含む。外

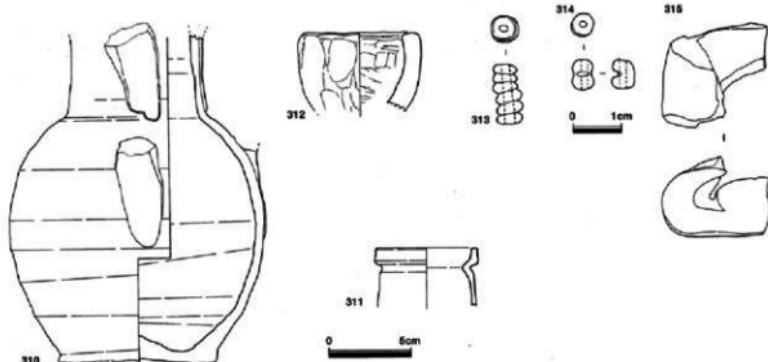
面は青灰色を呈すが熱のため酸化還元したものであろう。調整は粗い回転ヘラ削りである。腹部上半から頸部に取っ手を貼り付ける。表面には劣化した粧の他にガラスがわずかに付着する。内面には青緑色のガラスが厚く付着する。特に底部から肩部の一部は1mm以上厚さで付着しており、横にして注ぐ途中で固まつたものである。また、ガラスの厚い部分は取手の反対側ではないのでガラスを鋳型に注ぐ時には取っ手を利用せず、何かで挟んで注いでいる。付着したガラスはカリウム鉛ガラスである。311は口縁のみ残存している。復元口径6.3cmを測る。0887から出土した。胎土は暗灰色を呈し白色砂を多く含む。外面は黒褐色で釉の痕跡は見られない。内面には薄くガラスが付着しているが劣化のため白色を呈す。312は壇堀である。底部を欠く。復元口径7.2cmを測る。外面は指ナデ、内面はヘラナデを施す。胎土は白色を呈す。外面は酸化還元のためわずかに青灰色を呈す。内面に付着物はなく螢光X線を使用した分析でも何も検出できなかった。313・314はガラス小玉未製品である（写真は巻頭カラー）。313はSK0128から出土した。迷結したままの未製品で径5mm、長さ1.3cmを測る。深緑色で透明度が高い。円形の気泡を多く含む。314はSK0144から出土した。313と同色であるが表面が研磨されてなく、不透明である。円形の気泡を多く含む。315はガラス片である。310の内面付着のガラスと同色である。円形の気泡を多く含む。不透明である。ガラス原料か。この他にもガラスが付着した壇堀片が小玉は多く出土している。ガラス関連以外には銅錫亞が出土している。細片で表面の化粧土も剥落しているが隣接する85次調査で出土した片口錫錫型と類似している。また、中世後半から近世にかけての土坑から多量の鋳造鉄滓が出土した。

7. その他の出土遺物

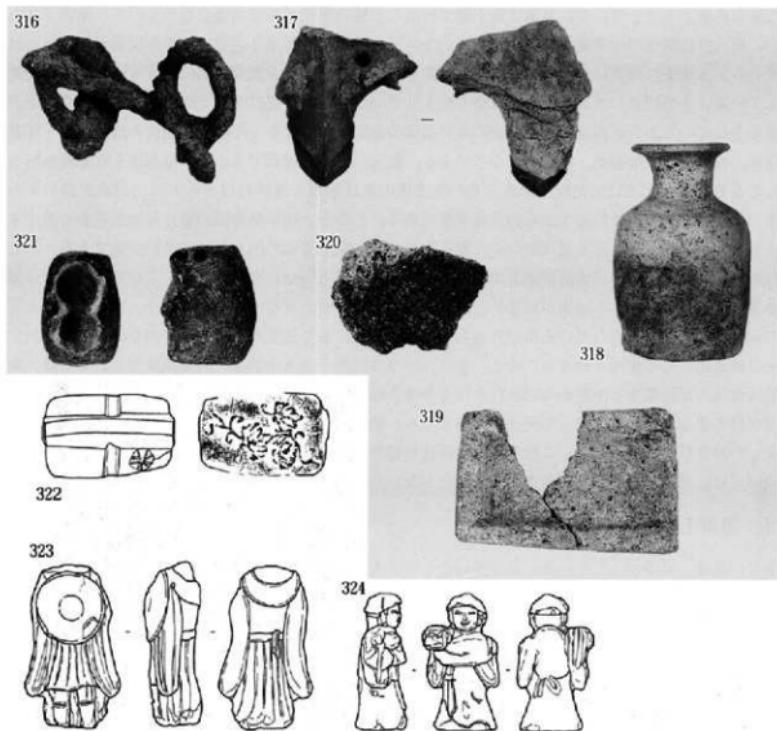
316は鉄製の轡である。第3面のSK1124から出土した。径9.5cmの鉄輪を鏡板として使用している。土器を伴わないため時期は不明であるが8世紀末まで遡る可能性がある。317は0677の出土。人面で鼻先から眉まで残っているが上端は端部が残っているので頭は存在しない。胎土は灰色で砂は含まない。表面は暗灰色を呈す。鼻筋はとても明確で鼻先まではカーブしながら伸び、小鼻は膨らまず溝によって表現されている。鼻の穴もあいており、径2cm、奥行き3cmを測る。目はかなり盛り上がりで、誇張されている。欠損しているが上瞼に縱方向の溝があり装飾が施されている。また、瞼の上端に穿孔あり。瞼の中は暗灰色化しておらず、眼珠がついていた可能性がある。背面は平面を呈し、平らなものに貼り付けた痕跡がみられる。鬼瓦が正面を向くのに対し、やや左側を向くため、別の装飾品である可能性もある。318は柱穴状造構から出土した壺である。完形で出土した。口径9cm、底径11.3cm。器高19.8cmを測る。素焼きで外面淡桜色を呈す。胎土は細かく砂を含まない。調整は全体に粗い横ナデを施す。319は滑石製の硯である。縦5.9cm、幅3.8cm、高さ1cmを測る。表面に墨は付着していない。硯は全部で3点出土しており、0766から出土したものは約1/2を欠くが幅8cmの赤褐色の砂岩製で全体にきめ細かな調整を施しており、上面に墨が付着している。320は炭化米である。0969から出土した。米粒はびっしり詰まっているが雑然ではなく、ある程度の方向性をもって並んでいる。米粒の間に植物質の痕跡がみられることから粉殻がついた状態で穂ごと詰められていたものと思われる。321は滑石製の重りである。高さ4.4cm、幅3.4cm、厚さ3.1cm、重さ61gを測る。胴部を2ヶ所円形に抉っているのは重量の調整の為か。上端に穿孔があり、吊して使用したと思われる。表面は粗く研磨されている。322は滑石製のスタンプである。石錫からの再利用品であるスタンプ面は横4.9cm、縦3.1cmを測り、草花文が陽刻されている。背面には長辺方向に右錫取手を利用了した所面台形の取手がつくが、その中央部に穿孔があるため紐をとおして吊り下げていたと思われる。背面に花文がある。323・324は上製の人形である。323は頭部を欠くが現状で高さ5cmを測る。袖の長い上着を着



第34図 古代以前の遺物 (1/3、308は1/4)



第35図 製造関連遺物実測図 (1/3、313~315は1/1)



第36図 その他の出土遺物 (2/3)

て下は斐が多く入った袴を履いている。裾は前後で長さが違って前が短く、足に脚絆をつけているのが見える。手は胸の高さで笠を持ち、背中には布で包んだ荷を背負っている。旅装の僧侶か。324は高さ4.2cmを測る。右肩に小さな獅子の頭を担いだ獅子舞である。頭には頭巾をかぶり裾の長い着物を左前に着込んで腰のところで結ぶ。胸に前掛けをつける。顔は丸顔で目は半開き、唇は厚い。笑っているようにも見えるが、人間よりも地蔵菩薩に似た印象を受ける。獅子の顔は小さくかぶることはできない。頭頂部から後ろに太い髪が5条垂れている。この他に土製品の鋳型片が数点出土しているが、ほとんど何の鋳型なのか不明である。1点人形の腹部と思われる破片があるが浴衣状のものを着込んでおり、高さは20cm以上になると思われる大型の人形である。

8. 小結

本調査区は博多浜の北西端に位置する。南側約150mの22次調査では弥生時代の遺構が確認されているが、本調査区周辺では確認されておらず、本調査区内でも遺構・遺物とも確認できなかった。本調査区で最も古い遺物は古墳時代初頭の土師器である。器種は小型丸底壺などの破片の他には完形の

二重口縁壺が出土している。遺構は最下層で検出した柱穴群がその可能性を持つものの、確実ではない。竪穴式住居等の生活遺構も確認できていないが、東側の大博通り近辺では方形周溝墓が検出されており、本調査区周辺にも存在した可能性は高く、二重口縁壺も方形周溝墓に伴う可能性があると考えている。その後5～7世紀の遺物は全く出土していない。8世紀になると85次調査で竪穴式住居が検出されているが、本調査区では遺物のみで遺構の確認はできなかった。8世紀代の遺物は壊・坏蓋、高坏、長頸壺、土師器壺、移動式壺などである。確実に遺構が確認できるのは越州窯系青磁碗か出土したS D0999などで11世紀代である。その後遺構の数は急増し遺構のほとんどは白磁碗IV類やV-1・2類等を含む11世紀後半から13世紀前半である。しかし、越州窯青磁の破片は比較的多く出土するものの、青磁全体の出土量は少なく、龍泉窯系・同安窯系青磁の出土量は非常に少量である。これらから11世紀後半から13世紀前半までがひとつのピークであったと考えられる。この原因としては博多遺跡郡内でも沖浜への進出が始まり、以後沖浜が集落の中心となっていくことや、根石をもつ大型の掘立柱建物が建設されている事から何らかの歴敷地内に取り込まれた可能性や調査区の一部が14世紀以降道路として使用されていたこと、また、ガラス壙塙や小玉未製品、鋳造錫鉄型片、骨角器、鋳造鉄滓、人形鉄型など中世から近世にかけて多種多様の生産関連遺物が出土することから、長い間工房が立ち並んだ生産拠点として発達したことから、輸入陶磁器や国産陶器が出土するような遺構が減少した可能性が考えられる。これらの大規模な柱建物や生産工房、道路の同時性やそれとの関連については、周辺のこれからの調査結果を取込みながら検討していくなければならない。

9. 墨書き土器

多くの墨書き土器が出土している。気がついたものを表にしたが、まだ見逃しているものも少なからずあると思われる。墨書きの読解には財団法人日本習字教育財団の石原涉氏と宮崎秀公氏から大多な御教示を得た。107点の墨書き土器のうち白磁碗が65点、白磁皿が23点、白磁（？）壺3点、青磁碗6点、青磁皿1点、黒釉碗2点、瓦器椀1点、土師壺・皿7点を数える。このうち383の土師皿の表側は筆置として使用されたと思われ、表面が墨で汚れているものの、文字は書かれていない。その他表に載せていないが、外底部を墨で塗りつぶした白磁皿も1点出土している。破損しているものや花押が多いため銘文の内容が判明したものは少ないが、現時点で「下」（8点）、が最も多く見られ、「市丸」（6点）がそれに続く。この銘文は2点の上器で併記されている。その他「館司」、「闇（カ）司」のような役職を現していると思われるものも出土している。「一郎」「國吉」のような日本人名は2点のみで後は「許」「柳」「王」「陳」「金（カ）」など中国人名である。395の「こめ」の様に内容物を書いたものなど銘文内容は多岐にわたる。上器に書かれた墨書きは陶磁器と違い3文字以上続く場合が多く中には祭祀に使用された可能性があるものもある。391は径15.5cm、高さ2.6cmの土師壺であるが底部一杯に墨書きを施している。まず「備」に似た字を何度も書いたのち、逆さまにして花押等を重ね書きしている。祭祀関連か。400は漢字で「天竺□□」（文字数は3文字以上）と書かれており、414は平仮名で3文字以上書かれている。343は人面土器であるが、複数個体の破片が存在する。また墨書き土器ではないが431は青磁皿のI類で、外底部に線刻を施している。銘文は不明である。

10. 骨角器

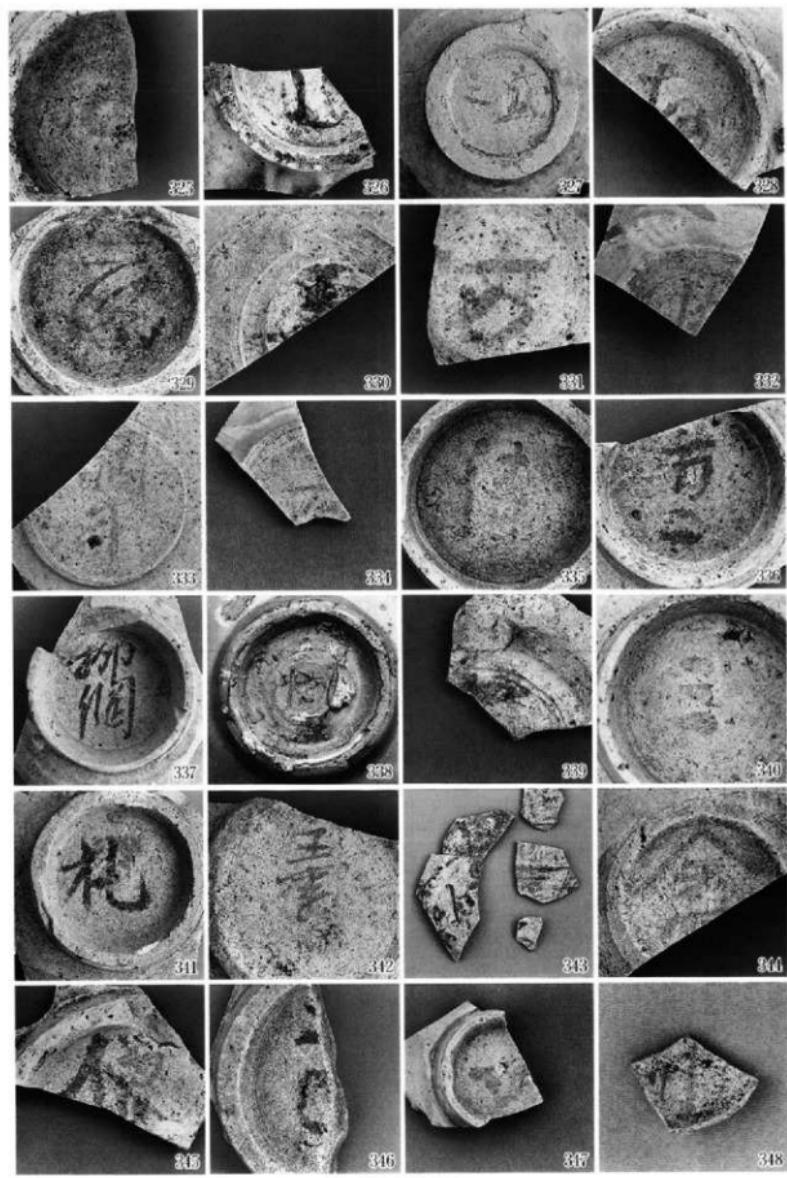
第42図433・434は簪である。2点とも基部が欠損しているが現状で433は長さ9.1cm、幅1.3cm、厚さ2.5mmを測る。表面には中足骨の縱溝を利用した溝があり、これに直交するこまかなキズが多数みられる。先端部に鹿角表面の溝みに山來すると思われる浅い溝みがあり、鹿角製の未製品と思われる。第1層

出土。434は長さ10.8cm、幅1.05cm、厚さ3.5cmを測る。0866出土。435は0242から出土した。現状で長さ6.7cm、幅6mm、厚さ4.5cmを測る。断面は丸みを帯びた備鉢状である。図下側先端は熱をうけ黒色化しているが、長軸に対しやや斜めに傾むき一部に研磨痕がみられる。形は縄文時代の小型ヤスに似ていると思われるが、齊か擬似針の一種であろうか。12世紀後半か。436は0865から出土した鹿角製の弭である。十仄で基部が潰れているが現状で基部の長径2.6cm、短径2cmで高さ8.2cmを測る。全体が緩やかに彎曲しており先端に向かって細くなる。先端から2.5cmの所に弦を掛けたための段がつく。13世紀前半か。同じく博多遺跡群の地下鉄呉服町C区出入り口調査地点出土の弭とはほぼ同型である(第43図437・438)。437は基部長径2.2cm、短径1.7cm、高さ7.7cm。438は基部はほぼ円形で径1.9cm、高さ5.9cmを測る。先端部に長軸に直交方向の擦痕がみられる。437・438ともくびれ部の穴は後からの欠損である。鹿角製の弭とされるものは縄文時代の貝塚から多数出土するものの形が非常に異なり、両端の弭に弦を結びつけるタイプである。弥生時代以降は佐賀県柴畠遺跡で弦の先に輪を作り弭に引っ

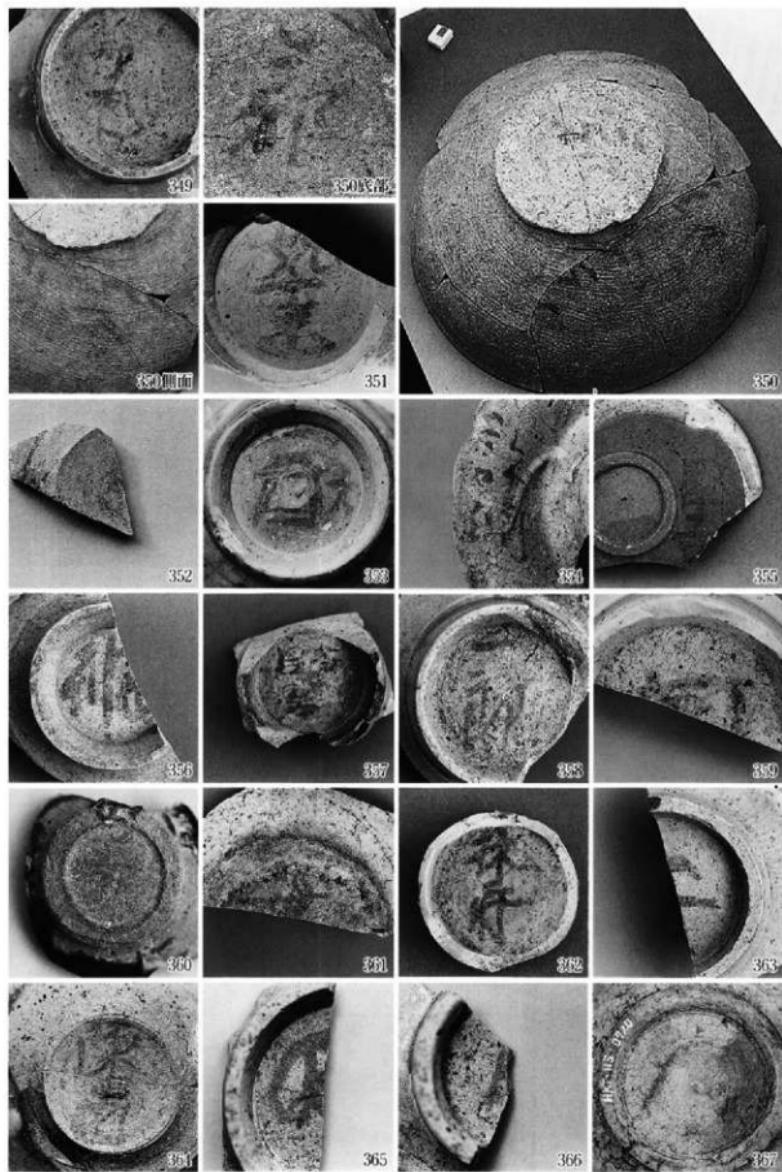
遺跡	通	新文	記憶	参考文献
325	0113	不 明	白磁碗形鉢	羽衣城
326	0128	木 陶	白磁碗	外丸錫
327	0128	三 磐(力)	人目手鏡	外丸錫
328	0127	不 明	白磁碗	外丸錫
329	0127	(花瓶)	白磁碗	外丸錫
330	0127	木 陶	白磁碗	外丸錫
331	0127	方 方	白磁碗	外丸錫
332	0127	不 明	白磁碗	外丸錫
333	0127	■ 井	白磁碗	外丸錫
334	0127	カ	白磁碗形瓶	外丸錫
335	0127	有	白磁碗V-4箱	外丸錫
336	0127	方 二	白磁碗V-1箱	外丸錫
337	0127	卯 銅	白磁小瓶	外丸錫
338	0127	青	青磁瓶	外丸錫
339	0141	不 羽	土磁瓶	外丸錫
340	0141	二	白磁碗V盤	外丸錫
341	0145	木	白磁碗形瓶	外丸錫
342	0148	七 漆	白磁碗V-1箱	外丸錫
343	0167	人土上	白磁碗V-2箱	外丸錫
344	0121	舟 (力)	白磁碗V-1箱	外丸錫
345	0201	常	白磁酒器	外丸錫
346	0209	六 陶	白磁碗形瓶	外丸錫
347	0203	六 陶	白磁碗形瓶	外丸錫
348	0210	二 (井)	白磁碗	外丸錫
349	0210	良 (舟) 人木	白磁碗形瓶	外丸錫
350	0210	基 (子) 木	白磁碗形瓶	外丸錫・経西
351	0211	一 朝	白磁碗	外丸錫
352	0311	八 陶	白磁碗	外丸錫
353	0311	■ 大	白磁碗	外丸錫
354	0317	野 木	白磁小瓶	外丸錫
355	0387	通 合	白磁碗形瓶	外丸錫
356	0413	解	白磁碗	外丸錫
357	0511	輝 (男)	白磁碗	外丸錫
358	0517	一 鹿	白磁碗V-2箱	外丸錫
359	0603	不 明	白磁碗V瓶	外丸錫
360	0671	二 (舟)	白磁小瓶	外丸錫
361	0678	不 羽	白磁碗V-1箱	外丸錫
362	0706	林 (井)	白磁碗	外丸錫
363	0720	二 (カ)	白磁碗形瓶	外丸錫
364	0715	■ 井	白磁碗V瓶	外丸錫
365	0715	(花) 井	白磁碗	外丸錫
366	0718	不 明	白磁碗	外丸錫
367	0720	二 (弓)	白磁碗形瓶	外丸錫
368	0720	下	白磁碗V瓶	外丸錫
369	0720	白 ■	白磁碗V-1箱	外丸錫
370	0720	市	白磁碗V-4箱	外丸錫
371	0720	下	白磁碗V-3箱	外丸錫
372	0720	弓丸、下	白磁碗V-2箱	外丸錫
373	0720	丸丸	白磁碗V-5箱	外丸錫
374	0720	二 (弓)	白磁碗V-3箱	外丸錫
375	0720	丁	白磁碗V-4箱	外丸錫
376	0720	開 ■	白磁碗V-4箱	外丸錫
377	0720	五 (弓)	白磁碗V-4箱	外丸錫
378	0720	丸丸、下	白磁碗V瓶	外丸錫

通	出・進	新文	古値	参考文献
379	0720	-	白磁碗	外丸錫
380	0720	六 甲	白磁碗V-1箱	外丸錫
381	0720	-	白磁碗V-2箱	外丸錫
382	0720	丙 丸	白磁碗V-3箱	外丸錫
383	0720	丙 丸	白磁碗	外丸錫
384	0720	御 三 井	白磁碗形瓶	外丸錫
385	0720	-	白磁碗	外丸錫
386	0720	仁 光	白磁碗V-1箱	外丸錫
387	0720	「北朝」	白磁碗	外丸錫
388	0720	「北朝」	白磁碗	外丸錫
389	0720	不 明	白磁碗	外丸錫
390	0865	不 明	白磁碗	外丸錫
391	0865	「北朝」	白磁碗	外丸錫
392	0865	室 (カ)	白磁碗	外丸錫
393	0900	不 用	白磁碗	外丸錫
394	0900	八	白磁碗	外丸錫
395	0900	ごめ	金魚皿青磁碗	一書
396	1027	不 用	白磁碗	外丸錫
397	1027	不 用	白磁碗	外丸錫
398	1028	不 用	白磁碗V-1箱	外丸錫
399	1029	「北朝」	壺	捲芯
400	1028-1128	火三	土瓶	「外丸錫」
401	1144	-	白磁碗	外丸錫
402	117	西 木	白磁碗	外丸錫
403	117	「北朝」	白磁碗	外丸錫
404	126	不 用	白磁碗V-2箱	外丸錫
405	126	金 まよ	白磁小瓶	外丸錫
406	2 通	不 用	白磁碗V-2箱	外丸錫
407	2 通	「北朝」	白磁碗	外丸錫
408	2 通	御 田	白磁碗	外丸錫
409	2 通	開 ■	白磁碗V-3箱	外丸錫
410	2 通	共	金魚皿青磁碗	外丸錫
411	2 通	■ 朝	白磁碗	外丸錫
412	2 通	不 用	白磁碗	外丸錫
413	2 通	不 用	白磁碗V-2箱	外丸錫
414	2 通	みかづ (平假名)	十握壺	外丸錫
415	2 通	飛 丸	白磁碗	外丸錫
416	2 通	御 田	白磁碗	外丸錫
417	2 通	不 用	白磁碗	外丸錫
418	2 通	不 用	瓦器	外丸錫
419	2 通	-	白磁碗V-2箱	外丸錫
420	2 通	表記	「北朝」	白磁碗V-2箱
421	2 通	御 朝	白磁碗V-2箱	外丸錫
422	2 通	五 ■	白磁碗	外丸錫
423	2 通	御 朝	白磁碗	外丸錫
424	不 用	ち	白磁碗V-1箱	外丸錫
425	S.P.003	上	白磁碗形瓶	外丸錫
426	0117	己?	白磁碗V-2箱	外丸錫
427	0117	六 (カ)	白磁碗V-1箱	外丸錫
428	0117	不 用	白磁碗V-1箱	外丸錫
429	六 (力)	白磁碗V-1箱	外丸錫	
430	0117	不 用	白磁碗	荷台里
431	0740	小 用 ■	白磁碗	外丸錫
432	2 通	元 丸	白磁碗形瓶	外丸錫

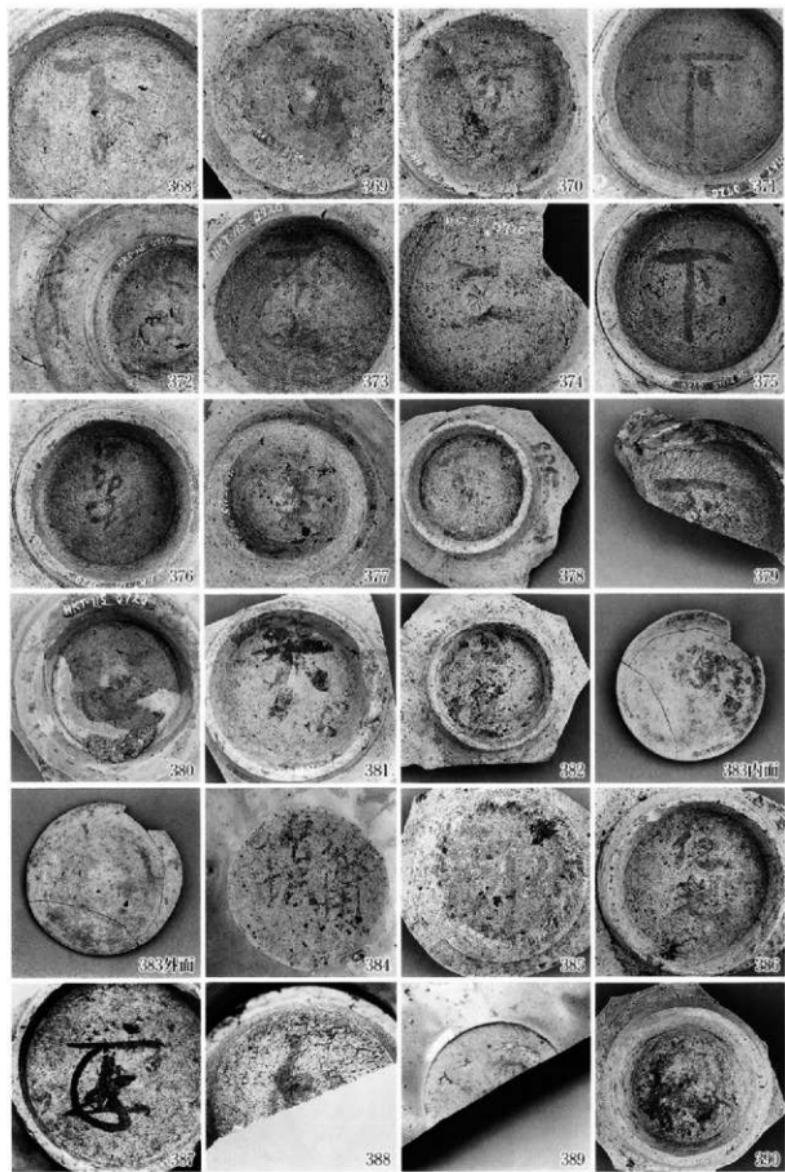
出土墨書き土器一覽



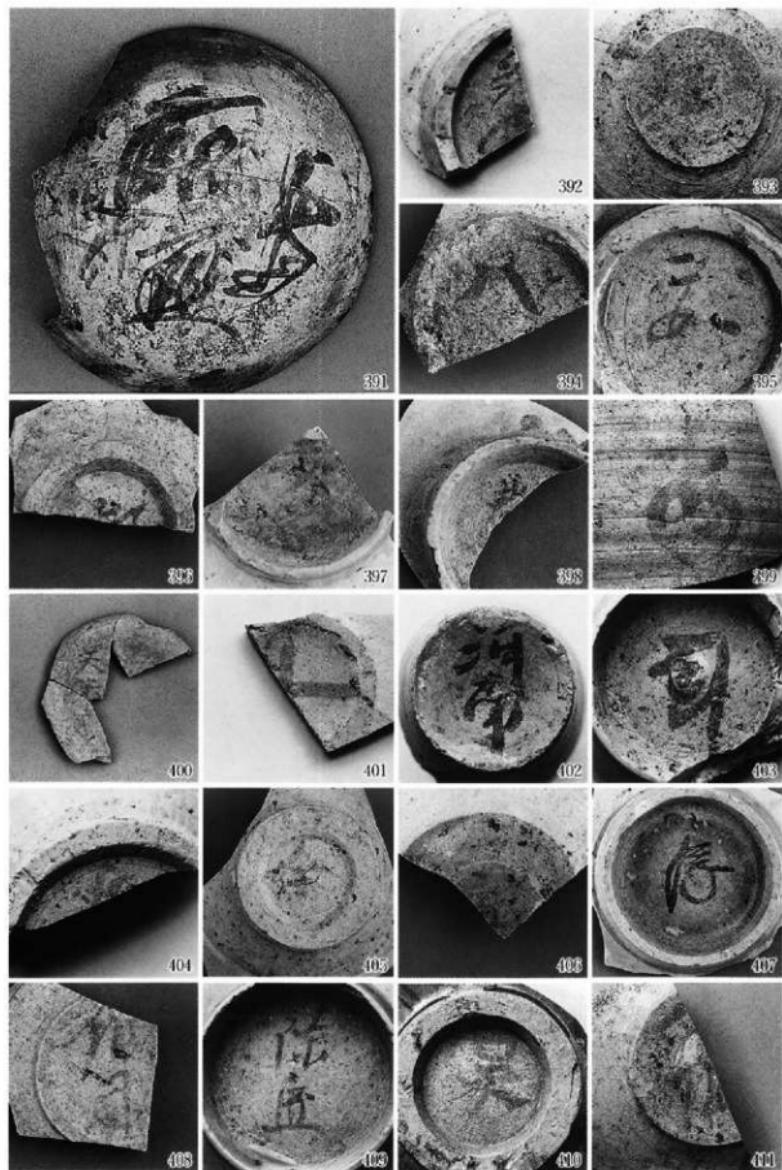
第37図 墓書土器 I



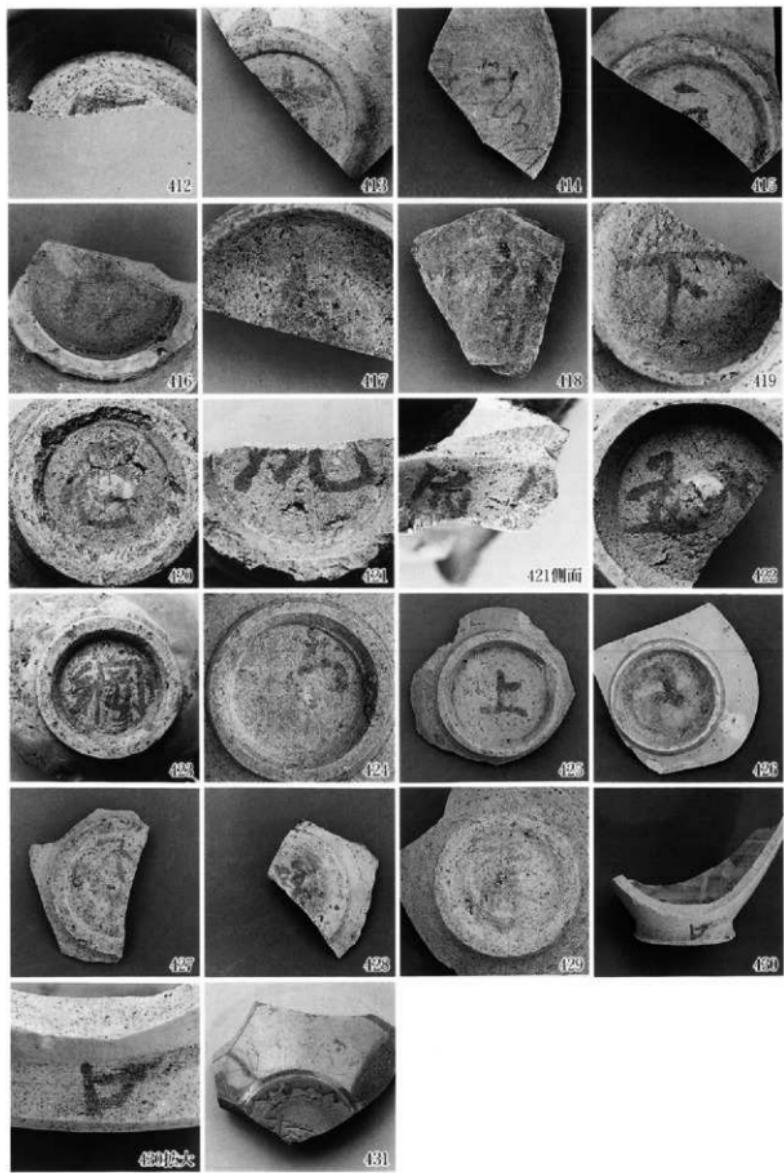
第38図 墓書土器Ⅱ



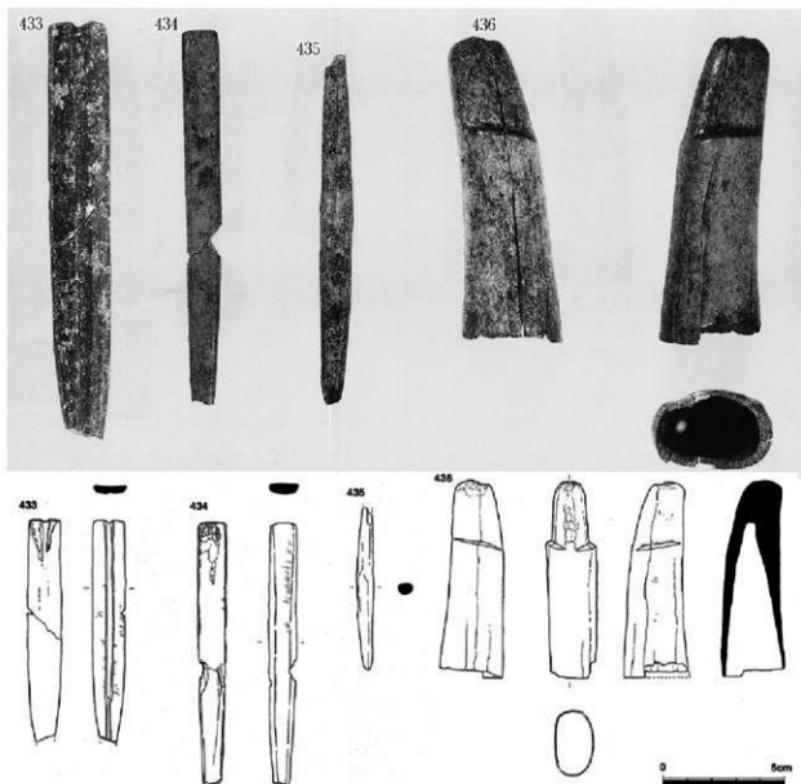
第39図 墓書土器Ⅲ



第40図 墨書き器Ⅳ



第41図 墓書土器V

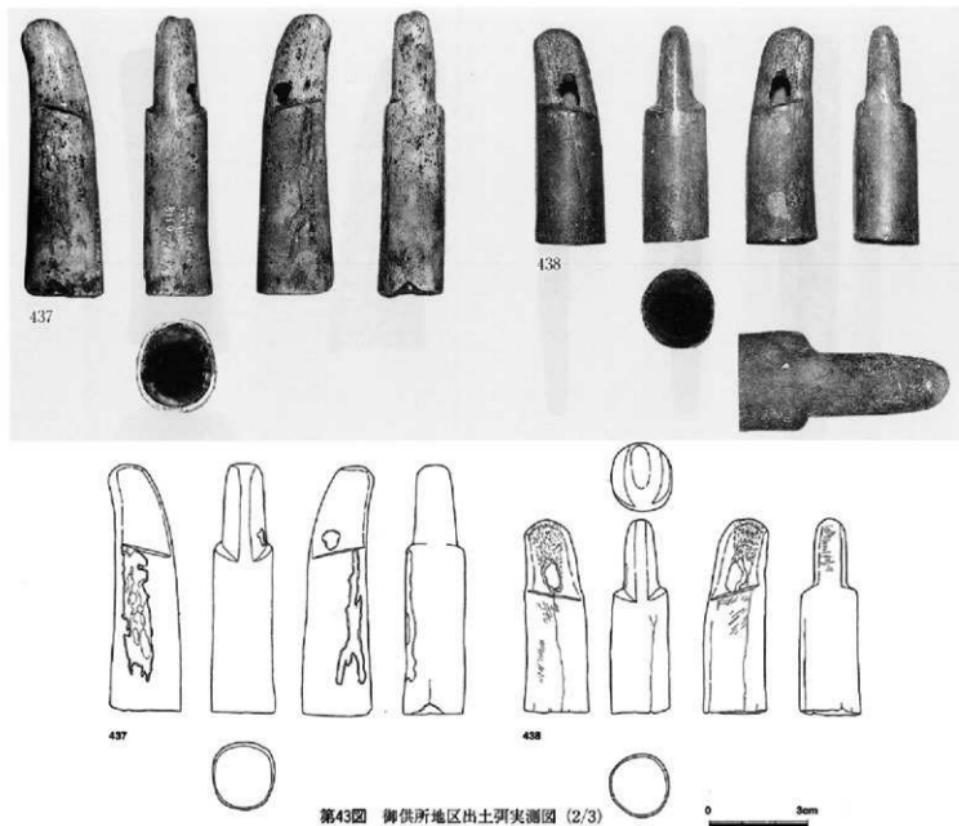


第42図 骨角製品 (1/2)

かけるタイプが登場して以来、弓の両端を細く削って弦を掛ける弓は多数出土している。また、そのほとんどは弓本体を削って弭としているが、少数であるが銀製・銅製の弭を被せるものも出土している。

博多遺跡出土の弭は3点とも表面に細かなキズがあるが、このキズは433・434の番でも見られるため使用時にいたるキズではなく制作時のキズと考えられる。ちなみに弦が引っ掛かる段の部分にはキズやすり減りはみられない。弦は先に輪を作つて弭に引っかけるため輪の径によっては段の部分まで差し込むわけではない。しかし弦の取り外しを繰り返し行えば先端部に弓の長軸方向の擦りキズがつく可能性は高いと思われる。また、3点とも基部の厚みが2mm以下ときわめて薄い。精巧な作りではあるが矢を発射するときの激しい振動に耐えうるのか疑問である。しかし、ほとんどの弭が本体を削ったものであるのに対し、わざわざ鹿角製のはめ込み式を製作するのは装飾の為や儀式用などの可能性が考えられる。

後述するように本調査地点では骨角器製作時の痕跡が出土しており、骨角器製作工房が存在したこと



第43図 御供所地区出土弾丸測図 (2/3)

は確実であり、これらの骨角製品は未製品である可能性が高い。

骨角器材料(第44図) 骨角器製作の材料としてシカ角、シカ中足骨、ウシ角を使用している。1~3は雄シカの頭蓋骨片である。大きさからそれぞれ別個体である。1と2は角の根元にナタによる切断痕がみられる。3は左側角座下の部分であるが残りが悪く、切断痕は認められない。4は中足骨を左右に切断している。骨角器の材料であろうか。長さ7cm、幅1cmの平坦な面があるため簪等の原料として使用できる。5~8はシカ角の小片で写真7の長辺で1cm程度の大きさである。5に鋸挽きした痕跡がみられる。9~14はウシ角芯である。いずれも根元側を鋸で切断している。右側は13の切断面拡大図であるが、鋸の引いた痕跡がほとんど見えないぐらい細かな切断痕である。写真以外にも小片が出土しているがほとんど接合しなかったため、角精の利用方法は不明である。1007出土、12世紀後半か。他にウシ右前足の手根骨から遠位部出土しており、この場で解体から角精の取り外しまで行っている。

11. 動物遺存体

今回の調査地点では造構検出時の標高が3.7mと高いにも関わらず井戸以外の上坑でも多くの遺存体が比較的良好な形で出土した。時期に関してはほとんどが11世紀後半から14世紀に集中する。資料は篠による選別等はしておらず、肉眼により確認したものの取り上げた。したがって魚類など細かな資料のほとんどを見逃したものと思われる。また、調査担当者の認識不足のため貴重な資料をみすみす見逃してしまった場合も多いと思われ、反省すべき点は多い。資料は取り上げたのち水洗いし、乾燥途中で10%前後のバインダー溶液を筆で塗ったが効果がみられなかつたため、乾燥後20%のバインダー溶液に丸2日沈めて浸透させた。これである程度劣化を遅らせているが、哺乳類の長幹骨は表面の剥落が進んでいる。

資料の同定については担当者が同定用の現生資料を持たないため、国立奈良文化財研究所の所蔵資料を利用させていただき、松井章氏からは多くの助言を頂いた。まだ未同定のものが残っているが現状での成果を報告する。

哺乳類

イルカ類(第45図1～3) 50点が出土し全体の13%を占める。イルカ類は博多遺跡群では多く出土する哺乳類である。対馬海流が流れる玄界灘に向した博多湾はクジラ・イルカ類の通路であり、古来から盛んに捕獲・利用されている。出土部位は下顎骨が1点出土しているほかは、ほとんどが椎骨で僅かに肋骨が出土している。椎骨の多くは棘突起と横突起がない椎体のみで出土し、突起の根本には切断痕がみられる。これは博多遺跡全体や東側に位置する箱崎遺跡などでも同様で、当初は海岸での解体時に突起などを切り落として集落内に持ち込んだものと考えていたがS K0118では切り落とされた突起の先端部が同じ遺構内から出土したため、現地に持ち込んだ後に切断しており、肉を骨から外す際邪魔な突起部分を切り落とした可能性がある。他の哺乳類と違い利用する現場まで自ら歩かせて連れてくることができないクジラ・イルカ類は民俗例では浜辺で解体してから集落に持ち込むことが多い。しかし、博多遺跡の発掘調査では頭蓋骨や椎骨が多く出土する。これはA、当貿易当陶器類の荷揚げ場であった店屋町近辺がイルカ類の解体所も兼ねていた。B、解体後捨てられた骨を肉がまだ付着している等の理由で持ち込んだ。C、解体・利用の方法が近現代と異なっていた等の理由によるものと思われる。第45図1は右下顎骨近位部である。2・3は椎骨である。2は棘突起を根本から切り落としている。3も棘突起・横突起を切り落としているほか、上部が火を受け黒化している。シカ(第45図4・5) 最も多く124点出土し、破片全体の33%を占める。前述した骨角製品の材料としてだけではなく、食料としても多く利用されていたと思われる。出土部位はほぼ骨格全体がみられる。4は右中手骨で遠位端を欠く。中都や下傷で骨折した痕治療している。5は脛骨遠位端・踵骨・距骨である。連結して出土した。解体痕あり。この他S D0126では指骨の基節骨から末節骨までが連結して出土しており調査区内で解体作業が行われたことを示している。

イノシシ 48点が出土し全体の12%を占める。下顎骨が多く出土している。解体時に多く出るはずの椎骨は種不明の分を仮にイノシシとしてもほとんど見られない。

イヌ 12点が出土し全体の3%を占める。解体痕が付いた大腿骨があるため、食用となったと思われる。7は中足骨で骨折後癒合した痕跡が見られる。

ウシ 32点が出土し全体の8%を占める。下顎骨や桡骨、尺骨など肉が少ない部分の骨が半分以上を占める。S K0798からウシの左右下顎骨、左右寛骨、尺骨が出土した。これらは解体時に最初に捨てられることが多いが、本遺構からは桡骨より遠位の骨が全く出土していないことや左右下顎骨が離れ

ていること、またそれに解体痕がみられないことから既に白骨化し分離した下顎骨と寛骨を使用した祭祀の可能性が考えられる。

ウマ 3点出土した。大腿骨、肋骨とも解体痕がある。

サル 2点出土し、そのうち1点の上腕骨に解体痕がみられる。今でも早良平野の南端部でみられ當時は多くいたと思われるが、博多遺跡では今のところあまり出土していない。カワウソ（第45図8）。下顎骨が1点出土した。解体痕はない。博多 次調査でも出土しているが、出土例は現在この2点のみである。

ウサギ（第45図9） 3点出土している。いずれも解体痕がみられる。

ネコ ネコの可能性がある上腕骨が1点出土している。

ヒト 頭蓋骨の一部が出土している。若年。墓からの粉れ込みか。

魚類 多数出土した。同定できたものはほとんどがマダイもしくはタイ類である。マダイはその多くが50cmを超える。第45図10はフグ類の前上顎骨もしくは歯骨である。近位側が切断されている。2点出土した。12はサメ類の椎骨で博多遺跡からは多く出土している。数個がまとまって出土が多い。これはイルカ同様海岸で解体され、各家庭には背骨が付いたブロックで持ち込まれたのであろうか。江戸時代には小呂の島、奈多、志賀島など博多湾の北端で多く捕獲しているが、これらは古代からの伝統を引き継いでいると考えられる。サメは当時粗削り（刺身）として多く利用される他に、腸の脂肪が灯油として利用されていた。椎体に解体痕が見られるものも多い。

今回の調査では淡水系の魚類は検出していない。海産魚に対し骨が小さいので見逃した可能性もあるが、他の中世遺跡でも淡水魚は多く出土しない。しかし、調査が行われている鎌倉、草加千軒、尾道など中世の都市は海に面しているため、当然の結果と思われる。

貝類 11は巻き貝の軸部で2点出土している。アカニシと思われる。SK0239でアワビが1点出土している。この土坑からは魚鱗や魚椎骨も出土している。

カキ 般長が4~5cmのものがまとまって出土している。遺存状態が悪かったが般が3~6cm前後と小粒な個体が多い。

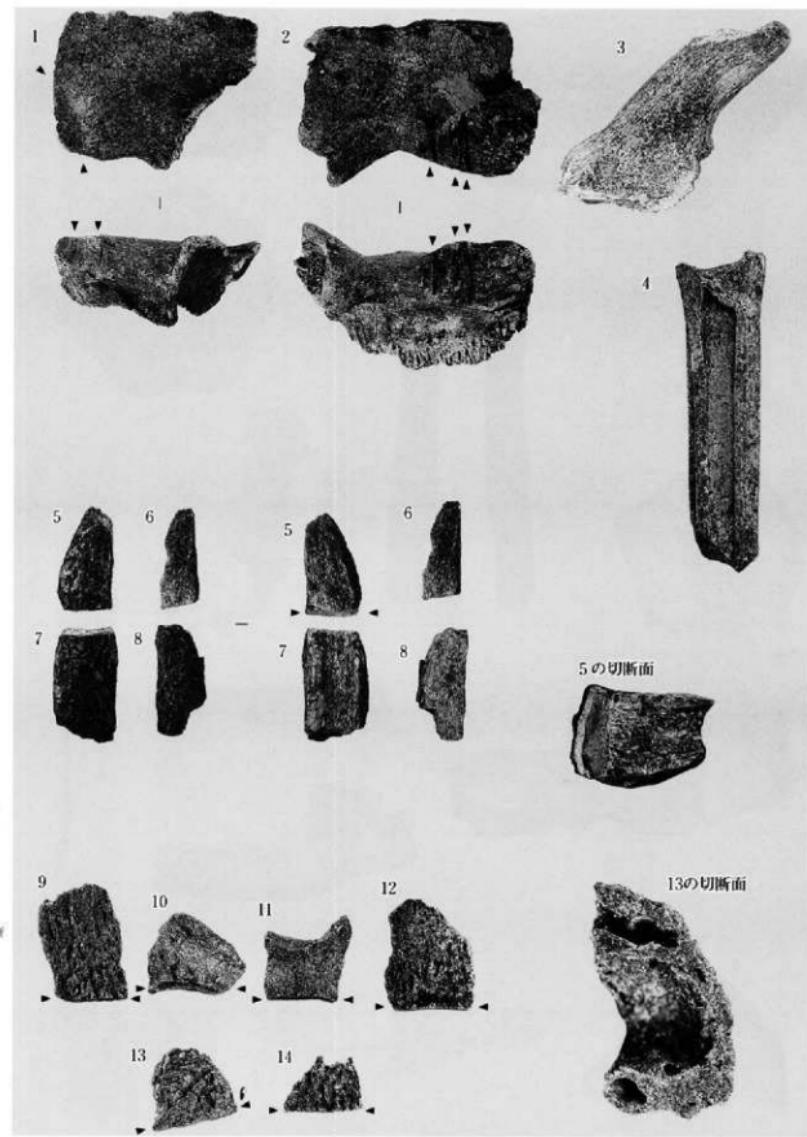
博多遺跡群ではほとんど飾による選別を行っていないにもかかわらず、多くの動物遺存体が出土している。しかしそれらの資料のほとんどは整理されておらず報告されることも希である。

参考文献

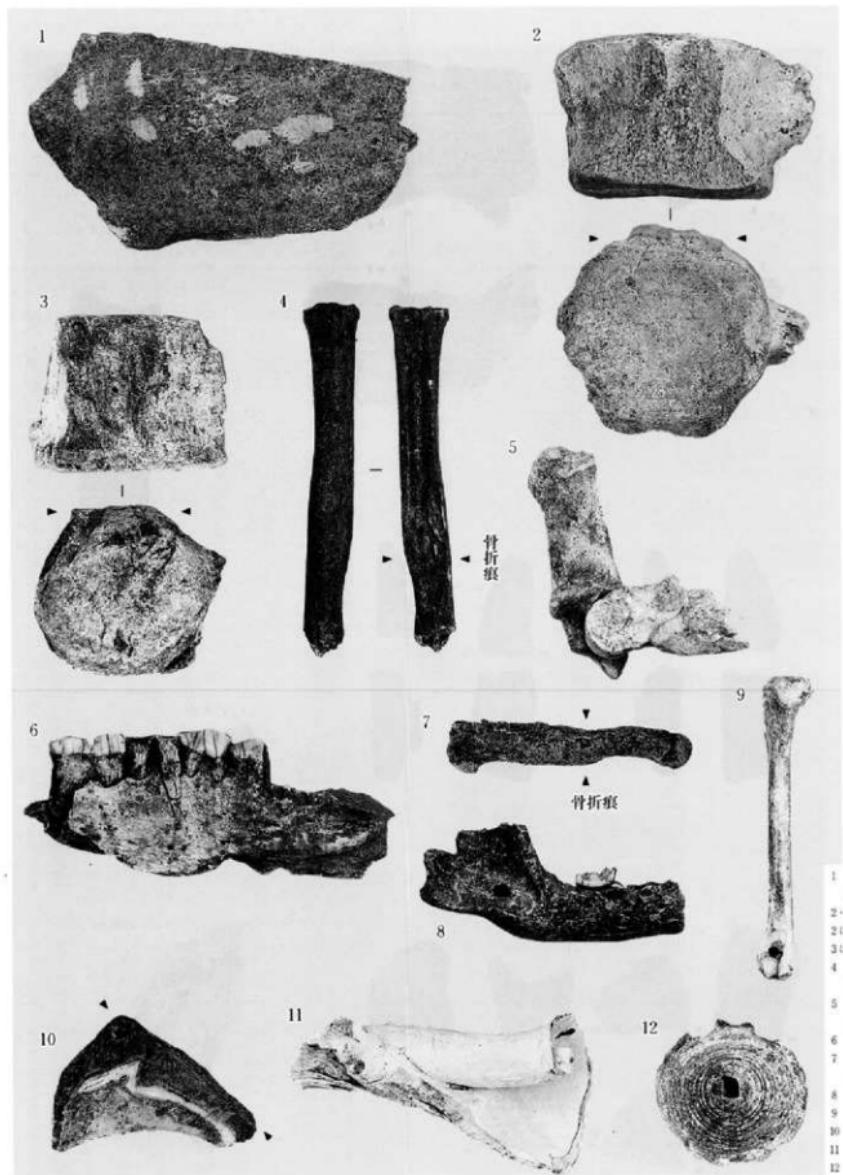
よみがえる中世1 一東アジアの国際都市 博多一 平凡社

図解・日本の中世遺跡 東京大学出版会

考古学と自然科学2 一考古学と動物学一 同成社



第44図 出土動物遺体 I

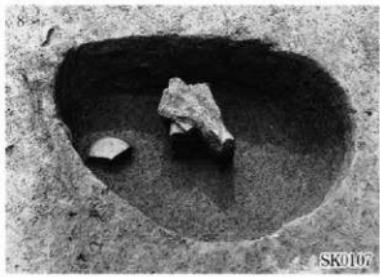


第45図 出土動物遺体II

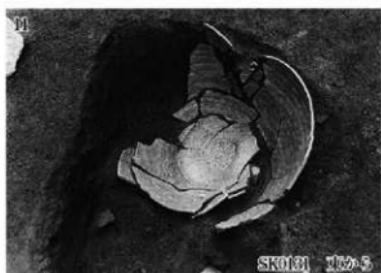
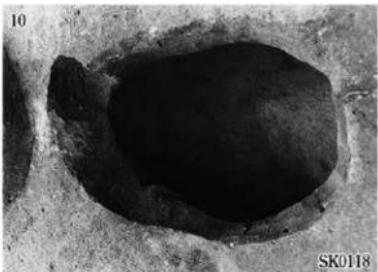
- 1 イルカ類右下顎
開節部
- 2-3 イルカ類脛骨
- 2は切歯部、一部炭化
- 3は切歯部、一部炭化
- 4 シカ右中手骨
骨折部あり
- 5 シカ胫骨・腓骨
- 6 イノシシ左下顎
- 7 イヌ右中足骨V
骨折部あり
- 8 カワウソ右下顎
- 9 ウサギ左上腕骨
- 10 アカニシ
- 12 サメ類椎骨

図 版

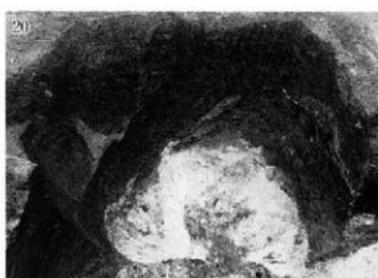
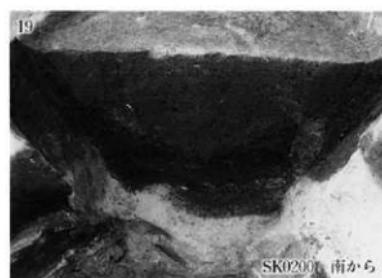
図版 1



図版2



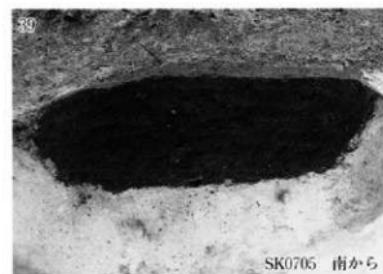
図版 3

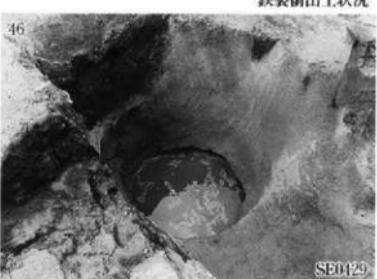
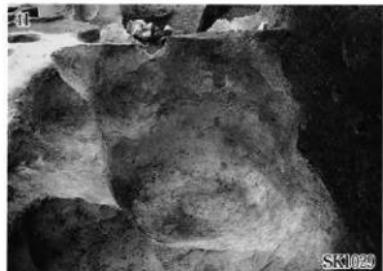


図版4



図版 5





図版 7



博多 82

博多遺跡群第115次調査の報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第708集

2002年3月29日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
☎ 092-711-4667

印刷 株式会社 西日本新聞印刷
☎ 092-611-4431